もったいない・おかげさま・ほどほどに、が環境と人間を育てる

M·O·H 通信

もう

16号
2007
Spring

★MOH通信の役割★

持続可能で豊かな循環型社会を築く社会人の意識を向上するためMOH通信は情報を発信し交流を続けます

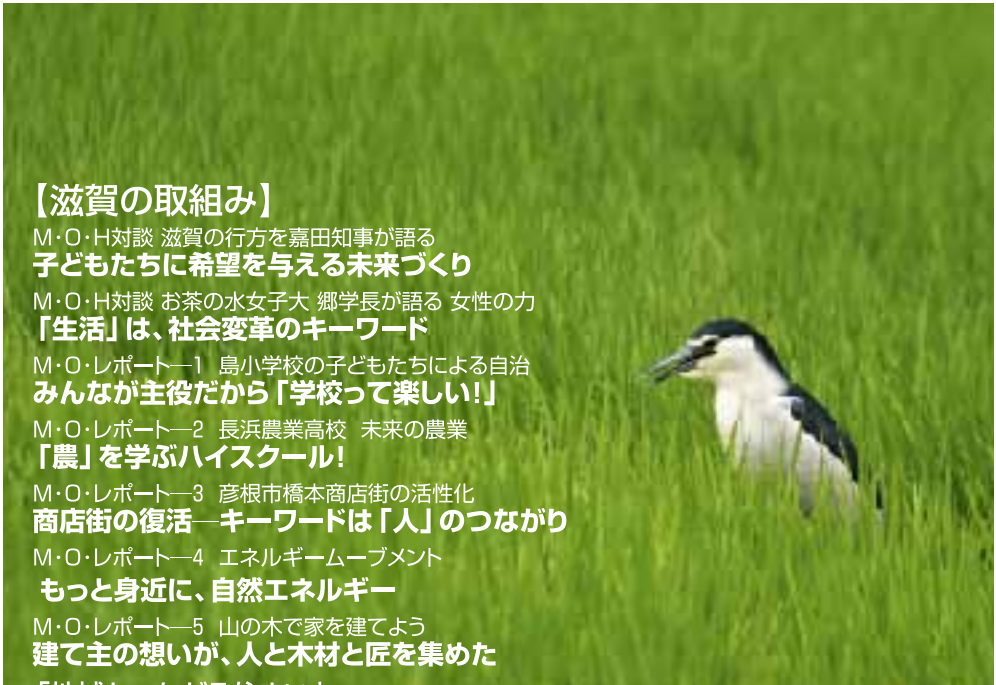
M 循環
→もったいない
他の生命を奪って得たものを使わせて頂く

O 共生
→おかげさま
人は一人では生きられない、環境によって生かされている

H 抑制
→ほどほどに
欲はほどほどに、良き環境を作り上げるために

「M·O·H」のマーク ＝ 牛

牛は環境の象徴ともいえます。牛糞はメタンガスになり、肥料にもなります。大地を作り、食物を育て、生物を養います。私たちは命の源ともいえる、牛を「MOH」のマークとし、循環型社会の象徴とします



【滋賀の取組み】

M·O·H対談 滋賀の行方を嘉田知事が語る
子どもたちに希望を与える未来づくり

M·O·H対談 お茶の水女子大 郷学長が語る 女性の力
「生活」は、社会変革のキーワード

M·O·レポート—1 島小学校の子どもたちによる自治
みんなが主役だから「学校って楽しい!」

M·O·レポート—2 長浜農業高校 未来の農業
「農」を学ぶハイスクール!

M·O·レポート—3 彦根市橋本商店街の活性化
商店街の復活—キーワードは「人」のつながり

M·O·レポート—4 エネルギームーブメント
もっと身近に、自然エネルギー

M·O·レポート—5 山の木で家を建てよう
建て主の想いが、人と木材と匠を集めた
「地域とつながる住まい」

M·O·レポート—6 家棟川の活性化
まちを見直すきっかけに

田んぼの中でえものを待つゴイサギ（野洲市内）

M·O·Hニュース

環境省　近畿環境パートナーシップオフィスが発行する『きんき環境館第4号（07年3月発行）』に当社が紹介されました。特集は「パートナーシップですすめるCSR」です。

長浜市教育委員会の長浜アピール行動プロジェクト会議（通称NAAPナープ）では、「家族Time増量中!テレビTime減少中!＝脳は活性化中!」と題して家族時間の増加を推進中。テレビやテレビゲームの時間を減らし、こどもの脳を活性する手助けをしている。メッセージボードを作成し、家族に呼びかける。

分水嶺トレッキング、歴史ガイド、食文化体験　鯖街道　観光ルート化　京都新聞2007/1/10

若狭湾で取れた海産物を京都などへ運んだ「鯖街道」を地域活性化につなげようと、高島市などが観光ルートとしての整備に乗り出す。鯖街道の三ルートがいずれも、高島市と京都、福井両府県境の中央分水嶺をまたぐことから、分水嶺のトレッキングコースと鯖街道を結びつけたコースを設定し、地元のガイドが、街道の由来や歴史を紹介する体制も整える。

豊郷町内の空き家を改修　高齢者や子ども集う場に　京都新聞2007/1/12

県立大の「とよさと快蔵プロジェクト」とNPO法人「とよさとまちづくり委員会」は、豊郷町大町の空き家を改修し、高齢者や子どもたちが集う「コミュニティハウス」を整備。（記事では2月10日オープン予定）プロジェクト代表の環境科学部三年中野優さんらは「地域で支え合い、誰もが気軽に集える居場所になれば」と話している。

古民家民宿に再生　田舎の癒やし　観光に　200/2007/1/15

滋賀県は「田舎暮らし」を体験する観光業の振興と、農山漁村の活性化を目指し、新年度から空き家になった農村の民家を民宿として再生させる試みに着手する。滋賀の自然や文化を観光資源ととらえ、「田舎での癒やし」を求める都市部の住民を呼び込むのが狙いだ。

子育てに絵本　生かそう　読み語る大切さ強調　京都新聞2007/1/19

守山市在住の児童文学作家、今関信子さんが講演し、子育て中の母親たちに絵本を読み語る大切さを呼びかけた。今関さんは自身の子育てを振り返り、絵本に影響を受けた子どもたちが、登場人物や内容をまねて遊びの中に取り入れたエピソードなどを紹介。「子どもたちは大人からいろんなことを吸収する。読み方はどんなかたちでもかまわない。いろんな本を渡してあげて」と語りかけた。

「森の恵み」食卓へ　駆除のシカ有効活用　京都新聞/2007/2/2

南丹市美山町で有害鳥獣として駆除されるシカを食肉資源として有効活用しようと「南丹森の恵み（シカ肉）の利活用専門協議会」をこのほど設立。協議会は今後、シカ肉を使った料理レシピを研究したり、消費者に向けたPRの場を設けていく予定。

木造、伝統構法で守ろう　防災と景観保全両立へ　京都新聞/2007/2/2

彦根市の旧城下町に残る武家屋敷や町家などの耐震性を高めるため、県立大教授や建築士が「木造伝統構法彦根研究所」を結成。伝統的な工法に基づいて耐震性能を高める改修プランづくりを始めた。

湖国木材360戸 エコ村生活　来年開村へ 近江八幡で着工　京都新聞/2007/2/5

近江八幡市小船木町で計画が進められていた県内初の環境共生型住宅地「小舟木エコ村」がこのほど着工した。エコ村は省エネに努めることで、環境に優しく経済効率も高い生活を目指す取り組み。住宅は、県内産の材木を主建材として利用する。窓を大きくして採光や風通しを良くし、冷暖房を抑制、壁紙にはヨシで作ったヨシ紙も使う。

目次——「滋賀の取組み」

M・O・H対談 滋賀の行方を嘉田知事が語る
子どもたちに希望を与える未来づくり 嘉田 由紀子&森 建司……3

M・O・H対談 お茶の水女子大 郷学長が語る 女性の力
「生活」は、社会変革のキーワード 郷 通子&森 建司……13

M・O・レポート—1 島小学校の子どもたちによる自治
みんなが主役だから「学校って楽しい！」 ……23

ショート・ショート
ふれあい 第六回『さくら』 中井 二三雄……28

M・O・レポート—2 長浜農業高校 未来の農業
「農」を学ぶハイスクール！ ……29

M・O・レポート—3 彦根市橋本商店街の活性化
商店街の復活—キーワードは「人」のつながり ……34

M・O・レポート—4 エネルギームーブメント
もっと身近に、自然エネルギー ……39

M・O・レポート—5 山の木で家を建てよう
建て主の想いが、人と木材と匠を集めた ……43

MOH-ECOTOURISM—5
ツーリズム最前線 檀上 俊雄……48

「地域とつながる住まい」 清水 安治……51

M・O・レポート—6 家棟川の活性化
まちを見直すきっかけに ……53

〈商家の家訓の話 第二回〉
矢尾喜兵衛家の遺言 末永 國紀……59

環境とエネルギー 板倉 安正……61

「先生かわいい」 今関 信子……63

〈ドイツだより—5〉
アウグスブルグから 原 修子……65

本の紹介 ……67

若葉の季節 三山 元暎……68

藤樹先生に学ぶ その4 井上 昌幸……69

くつきの森へようこそ（漫画） オノ ミユキ……73

編集長のつぶやき つじむら ことみ……77

講演日記 ……77

読者の声 ……78

MOH 川柳

sennryuu MOH

15年 乗った車は まだ動く
ボツにするには もったいない
柴嵜 久子 61歳（高島市針江）

もったいないと 口では言うても
その心 忘れおる
岡本 まさみ 64歳（高島市マキノ）

●対談 嘉田 由紀子 vs 森 建司

滋賀県知事　　循環型社会システム研究所代表

〈リーディング テーマ 1—滋賀の行方を嘉田知事が語る〉

leading theme 1—Governor Kada talking course of prefecture Shiga

子どもたちに希望を与える未来づくり

「子どもたちの自らの生きる力、損なったらもったいない」

「もったいない」をキャッチフレーズに、嘉田由紀子滋賀県知事が誕生し、当初は公共事業の在り方を巡る県政が全国の注目を集めてきました。しかし、私たち滋賀県民は、それだけを、もったいない県政に望んだのではないはず。特に子どもを持つ母親たちは、我が子のための未来を、先輩である嘉田ママに託したのではないでしょうか。子どもたちと未来の希望をテーマに、これからの生き方、子育て、地方の在り方などについて、森代表がお話を伺いました。

■滋賀県公館
■2007年1月28日

「家庭の中は、全省庁あいのりです」

森　M・O・Hの運動を通じて、私は若い人たちに、未来への夢や希望を指し示していきたいと思っています。しかし、そのためにはまず、現状の危機を伝える必要があり、それが若い人たちを、絶望感に陥らせることにならないかという懸念があります。今日は嘉田知事に、子どもたちに希望を与える未来づくりという観点から、お話を伺いたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

　ではまず、これまでM・O・H通信を通じて、様々な先生方のお話を伺ってきたのですが、共通していると感じるのは、環境問題を総合的な問題と捉え、科学的、倫理的な視点を併せ持つことが必要だとされる点です。つまり、文理の融合ということだと思うのですが。

嘉田　私も、琵琶湖の研究を始めた頃から、一貫して文理連携ということを言ってきました。文と理は学問としては分かれていても、生活の中でつながっています。専門分化したものが、生活というフィルターを一旦通すことで、つながっているんです。

森　そうじゃないと環境問題は語れませんよね。

嘉田　語れません。私は「家庭の中は全省庁あいのりです」と申し上げているんですが、家庭の中では、教育に関する文部科学省の話もあれば、雇用に関する厚生労働省の話、食べ物に関する農林水産省の話もあります。つまり総合なんです。そこを出発点にして、様々な要素を組み立てて、施策を構築していくことが、私の「もったいない県政」の出発点でもあります。

森　なるほど。総合というのは、生活者の視点でもあると思うのですが、私はM・O・Hの運動の母体は、生活者でなければならないと思っています。そのためには、女性の存在が大きいのですが、なぜなら一つは、日常を見極める感覚が、我々男性より優れているんじゃないかということ、もう一つは、人生の価値観や幸福論について、子育てが大きなキーワードになると思うからです。今日は、知事の子育て論についても、ぜひお聞きしたいと思います。

　ところで、最近は、M・O・Hフォーラムというイベント型の催しを主催しておりまして、これは、人間の幸せという価値観の探求が、地元の町おこしにもつながると考えて、始めたものです。その関係で知り合ったのですが、余呉町で建築や家具作りを手がける清水陽介さんという人物がいます。彼の活動が非常に興味深いものなので、少し触れておきたいのですが。

嘉田　実は、私もよく存知ております。

森　そうでしたか（笑）。簡単に紹介しますと、彼はアフリカの発展途上の国々を自転車でまわり、現地の貧しい人々と生活を共にする中で、自分はやはり農業と建築をやろうと心に決めて、日本に帰ってきた経歴の持ち主です。それで、彼曰く、農業と建築が人間の原点だと言うんですね。これは僕にとって、目から鱗だったのですが、話を聞くと、そもそも農業と建築というのは、どちらもお百姓さんが手がけるという意味で、一つだったそうですね。

嘉田　そうなんです。そもそも一人の人間が、百の姓（かばね）を持つ。それが百姓だったんですね。

モノをゴミにするのは人間の意識です

森　百の姓ですか。姓というのは、職業という風に理解してよいのですか。

嘉田　はい。つまり、何でもできる。季節にあわせて、冬場は農閑期ですから、山に入って木材を切り出し、それを1年寝かせておいて、大工仕事をする。私は純粋に農村育ちですから、子どもの頃から、一年の生活サイクルが身に染み着いています。村の棟梁が家を建てるのは冬で、春先になると田植えや畑仕事が始まります。私の家は養蚕農家でしたから、5月になって桑の芽が出始めると、これでお蚕さんが育つんだと、子ども心に感じました。養蚕にも春、初夏、盛夏、晩秋と繁忙期のサイクルがあって、一年を通じてそれぞれの季節にあわせ、多様な仕事を入れ込んでいくのが百姓。ある意味でつまり自給自足の暮らしなんです。

森　なるほど。先の清水さんの生き方も、行政や市民グループから数多く講演依頼があって、社会の関心が高まっているんです。しかし一方で、経済人には、それで日本の社会が成り立つのかと、全く受け入れられない話でもあろうかと思います。そのギャップをいかに埋めていくべきかと思うのですが。

嘉田　もちろんそれはそうでしょうね。例えば、ボールペン1本を作るにも、工場が必要です。しかし、近代化が進み、いくら工場生産が可能になっても、人間は生物であることから逃れられないんです。人間の細胞は、工場では生産できません。最近、様々な代替食品がありますが、それだって石油を必要とします。石油や石炭は太陽の恵みで、それは、人間が工業で作り出せないところにあるんですから。

文明の発達で、人間は本当に幸せになれるのか？それを一番、敏感に感じるのは子どもたち

嘉田　工業生産と、百姓的な生産の違いは、テーラーシステムにあると思います。つまり流れ作業ですね。テーラーシステムは、20世紀初頭のアメリカで、フォード社により始まったのですが、車1台を組み立てるのに、一人の人間が毎日同じネジを締め、まさに人間を部品化することで、それが結果的に生産効率を上げたんです。今、清水さんたちがやろうとしていることは、その全く逆で、山の木を見て、木を切り出す人とつながりながら、家のプランを作って、家を建てる。そしてそこで住む。私も彼から、家こそ自給自足すればいい、そうしたらローンから解放されると聞いて、森さんと同様、目から鱗でした。これだけ緑に恵まれた

地域に暮らしているのですから、大工の技能を身に付ければ、不可能な話ではないのです。工業社会が極端に専門分化されているのに対し、百姓の世界というのは、人間が生きるための多機能を、自分の手元で組み立てて、それを個人の能力としていく。その違いだと思うんです。

森　お金儲けは手段であったはずなのに、いつからかそれだけになってしまったというのが、今の社会ですよね。

嘉田　手段と目的が、どうも入れ替わってしまったんです。私が知事選で言わせていただいた「もったいない」も、一つは文明の問題です。物事を専門分化して全体の効率性は良くなったかもしれないけれど、そこで当事者たる人間はどうだろうという問いかけでもあるんです。そこを一番、敏感に感じているのは、子どもたちです。ですから、子どもたちに希望を与える未来とは、と聞かれたら、私は百の姓を持つ、つまり色々なことができるように、子どもたちの力を育むことから始まると考えています。

森　そこで問題なのは、子どもが仮に、「農業をやりたい」と言ったら、ほとんどの親は、何を言っているんだとなるでしょう。実際、地域を守っているのは、ご先祖様からの土地を受け継いだ農業従事者でもあるのに、その人たちより、東京に出て、企業で出世した人たちのほうが偉いんだという、現代の価値観だと思うんです。

嘉田　それは「色眼鏡」なんです。私の専門である環境社会学も、出発点は「色眼鏡論」と言われますが、私たちは物事を見るときに、色眼鏡というか、一種の先入観をもってしか物事を見ることができないんです。例えば、ゴミについて、物そのものでゴミであるものはありません。小学5年生の国語の教科書（※「ごみ問題ってなあに」光村図書の小学5年（上・銀河）に収録）にも書いたのですが、ペンが1本、教室に落ちていたとします。ペンに名前が書いてあれば、当然、持ち主のもとに戻ってきます。学校の廊下に落ちていたとしても、まだ戻ってくるでしょう。しかし、それが学校の外、町の道路であったら、これはゴミになりかけです。ひょっとしたら拾って使う人もいるかもしれません。ですが、これが琵琶湖岸であったら…。これはゴミです。物として同じであっても、物というのは、人間との関係性の中でゴミになるんです。こういうことを書いたんですが、子どもたちは結構、反応してくれるんですよ。

森　経済社会でも同様のことが言えます。しかもゴミになれば、誰も責任を持たない。

モノの責任は工業界も担わなければ…

嘉田　それは利用価値とともに、所有価値という多面的な価値がなくなったからです。教科書にはそこまで書いていませんが、物には利用価値と所有価値、そして愛着という精神価値の三つがあって、それによって人と物の関係性が作られるのです。子どもがボロボロになった人形でも捨てるのを嫌がるのは、まさに愛着という精神価値があるからで、親がそれを勝手に奪ってしまってはいけないんです。ですから我が家では、二人の息子が使っていたおもちゃのブロックや本を、しっかりと残しておきました。今それを、「お父さん、こんなに汚して…」と言いながら、孫たちが使っています。

知事の子ども時代と、子育て論「嘉田家の子育て文化」

森　なかなかよそではお聞きできないかもしれませんので、知事の子育て論についてお聞きしたいと思います。その前に、知事自身は、養蚕農家にお生まれになって、どのような子ども時代を過ごされたのですか。

嘉田　我が家は養蚕農家で、父は長男でしたから、叔父や叔母が7人いて、みんなで13人家族でした。母は身体が弱かったもので、私は5歳の頃から井戸で水を汲んで、食事の支度を手伝いました。竈（かまど）でご飯を焚くにも、住んでいたのは平野部でしたから、薪になるものがないんです。それで、桑（くわ）ぜといって、葉を摘み取った後の桑の枝を、乾燥させてから焚きつけに使うのですが、乾燥させる間に埃だらけになるんです（笑）。味噌も自家製で、豆類の殻が混じった状態のものを、擂り粉木で一旦、すり潰して、そこに水を加えて、そのうわ水をお味噌汁に使っていました。

森　私は、さぞや勉強熱心な子ども時代を想像していたのですが…（笑）。

嘉田　農家の次女ですから、勉強をしていたら叱られました（笑）。でも、辛いいやな思い出が何もないんです。なぜなら、私自身、母の手伝いができることをとても誇りに思っていたからです。それが自分の自信にもつながっていました。ところが今、小学2年生の孫が、食事の支度を手伝っているのを見ると、不憫に感じてしまうんです（笑）。

森　わかります（笑）。私もそうなんです。

嘉田　大人から見ると不憫でも、当事

子どもが自分で生きるために「自分でする力」を育むことですね

者は全然不憫じゃないんですよ。むしろ、両親や家族が喜んでくれることを、自分の力としているんです。私の子育て論になりますが、73年にアメリカに留学（ウイスコンシン大学大学院）した当時、研究者として仕事に打ち込みたい、でも子どもも産みたいと、二つの思いの間で、本当に迷っていました。それで、現地のカウンセラーに相談したところ、「24時間、子どもにあなたの時間を与えなくていいんだ。嫌々24時間を与えて、あなたのせいでお母さんは仕事を犠牲にしたと口にする人生が、あなたにも子どもにも一番悪い。23時間は、自分の研究と仕事に使いなさい。残りの1時間でいい。その1時間をしっかりと、子どもの心をつなぐために使いなさい」と言われたんです。それが私の子育ての始まりでした。

森　言葉としては理解できます。しかし、それを実行するのは非常に難しい。どう実行されたのですか。

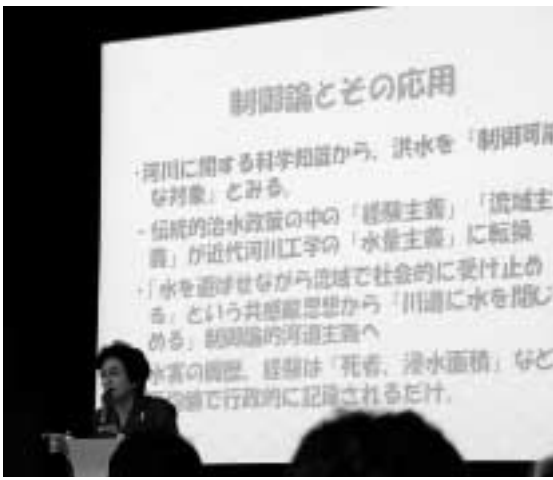
嘉田　本当に1日1時間だけです（笑）。そのかわり、子どもたちが、自分で自分のことができるように、3歳からナイフを持たせ、火のつけ方も教えました。それはもちろん、最初はビクビクしました。怖いですから。でも、これを怖いといって、親が手を出すと、子どもの力も伸びないんです。自分の子ども時代を振り返れば、包丁を使うことも、火を使うことも、ちゃんとやっていたんです。周りの大人が、手を出さずに、自由にやらせてくれていた。そのことを嘉田家の子育て文化だと思っていますから、孫にも伝えていこうと思っています。

森　子どもが自分でできることを一つ一つ増やしていって、それで自分に自信をつけるというのは、事実だと思います。ですが、今の学校教育では、ナイフや火なんて、もっての外じゃないですか。

嘉田　それは、学校や教育委員会に責任転嫁する親の問題ではないかとも思います。家庭ではなく行政に責任を問いますから、行政としては保守に回らざるを得ないんです。我が家ではとにかく、「お父さんもお母さんも、何れあなたたちより先に死ぬんだから、生活する力は自分自身で身に付けなさいよ」ということを徹底してきました。

うまく育ったかどうかは周りの評価もありますが、二人ともそれぞれに独立してくれています。一度、長男が大学に入った時、「お母さん、まわりの友達はリンゴの皮が剥けんのや。僕はそれができるから、感謝してる」と言われたことがあります。結局、これは親と子の互いの自立でもあるんです。「お母さん、リンゴ剥いてあげたよ」。「嬉しいわ、お母さん、あなたが剥いてくれたリンゴが一番おいしい」。そんな風に、互いが自立しながら、その上でつながっていくこともできるんです。

森　すべてにおいて手をかけるのが、一番の子育てではないんですよね。しかし、そういうことを書いた子育てのハウツー本は少ないでしょうから、ぜひ、知事に書いていただきたい（笑）。それと同時に、女性の社会進出を阻んでいるものは沢山あるのですが、環境を整えるだけでは、解決できないものもあるという気がしました。親と子の関係性を探るというのも、大切なことではないでしょうか。



講演をする嘉田知事

嘉田　今、子どもたちにとって問題なのは、家の中に自分の役割がないということです。現代の暮らしは、何もかも合理化することで、食卓の話題や、子どもたちの役割を奪ってしまった面があるのではないでしょうか。あえて不便さを残すことで、子どもやお年寄りにできる仕事がある。意図的に合理化、自動化しないという項目が、それぞれの家庭の中にあっても良いと思います。私が掲げるもったいないの一つは、「子どもたちの自らの生きる力を、損なったらもったいない」でもあるんです。

「精神と技能とお金」の三つのバランスがあってこそ生活

森　それはまさに、もったいない。ところで、知事は大学教授として、今の若い人たちと間近で接してこられたと思うのですが、彼らをどうお感じになられましたか。

嘉田　私が接してきた学生について言いますと、一つは自分の未来が描けないという学生が、とても多いですね。その理由は、自分がお金を稼がなくてはならないということが分からないからです。これまで全部、親掛かりできたから、就職してお金を稼ぐことを考えたことがないと言うんです。これは、親が子どもにお金の心配をかけまいと、必死でやってきたことの結果でもあります。二つ目は、色々な事の手続きが分からない。例えば料理をするにしても、手続きが必要です。目の前の畑に大根があったら、冷蔵庫の中に何があるかと考え、ブリはないからブリ大根はできないけれども、煮干があるから煮干大根ができるなと。これは応用力の問題で、一食分を作るにも、沢山の

手続きが必要なのですが、それが分からない学生が大勢います。それと三つ目は、色々な物事について、トータルに文化性や価値観を判断しますが、そこに迷いがある。これをどうにかしなければならないと思います。精神的な自信と生活的な技能、それから経済的な合理性と、これが人間が育つ上での3点セットではないでしょうか。精神と技能、そしてお金の三つのバランスがあってこそ生活なんです。

森　あまりに何もかもが発達した世の中だから、過程が分からない。文化も文明も当たり前になっていることに、問題が潜んでいるのかもしれませんね。

嘉田　文明というのは、人間の持てる力に対する延長として興ってきたものであると思うのです。暗い所でも物が見たいから電気を発明し、足で歩ききれない所に行きたいから自動車や鉄道を発明した。肉体機能の延長としての道具を作るところに、人間たる所以があるとも言えます。しかし、これは沖島（近江八幡市）のおばあちゃんから聞いたのですが、洗濯機は便利だけれども、洗濯機を買うためのお金を稼ごうと思ったら、パートに出なければいけない。でも、琵琶湖の浜で洗濯したら、洗濯機も電気代も要らないから、パートに出なくて済む。何より浜で洗濯するのは気持ちがいい。これを聞いて、私はハッとしたのですが、おばあちゃんにとって、浜での洗濯は、ついでに琵琶湖の様子を伺い、シジミでも獲ってお味噌汁にしようかと、仕事であって仕事でないんです。これが、先ほどの精神の問題とつながっているということだと思います。

森　精神があるからこそ、即、洗濯機の購入に走るのではなく、これまで通り、浜で洗濯をする選択肢もあるということでしょう。そういった精神的な贅沢、それが循環型社会を可能にする一つの価値観かもしれません。私が最近、特に思うのは、トイレについてです。自動で便フタが上がるというのは、本当に必要なのでしょうか。極端な話、ボットン便所でも、事は足りるのです。どれだけ新機能が必要で、どれだけお金をかけるのか、迷う人は少ないんでしょうか（笑）。

嘉田　トイレの話は私の専門分野でもありますから、話が長くなります（笑）。今日は控えておきますが…。トイレという文明も、肥え持ちはしんどい、もう嫌だと、バキュームカーで汲み取る方法に変わっていきました。でも、それだとお釣りが来る、臭いがある。さらに都会の孫がボットン便所を怖がる、田舎の香水だと揶揄される。つまり、機能とイメージがセットになって、汲み取り式トイレは時代遅れだと、拒否されるようになるんです。ここからは、滋賀県政にも通じる話になるのですが…。

森　ぜひお聞かせください。

地域主権を確立するために、財政再建をめざす

嘉田　では、汲み取り式に変わる望ましい形、水洗便所にしようということになりますね。その時、手法としては浄化槽でもいいし、農村下水道のような小規模下水道でもいい、他にも公共下水道、流域下水道と様々な選択肢があるのです。

森　それは地域の事情に照らし合わせて、一番最適な方法を取るべきでしょうね。

小柄な知事の手は温かく、しっかりと未来をつかむ手でした

嘉田　そうです。同じ機能を真っ当できるのならば、一番安上がりな方法を考えるのが行政施策です。しかし、これが国単位となると、そうはいかない部分があります。国の仕組みは、下水道の方が国庫補助率が高くなります。公共下水道なら、2分の1補助しますと。しかし、合併浄化槽なら、3分の1だと。こうなると、全体的に建設費用が高くつくのであっても、補助率が高いのであれば、下水道を採用しようか、という流れになりがちです。しかし、それは部分的合理であって、国家としては高コストとなるのではないでしょうか。こういうことの積み重ねが、日本の国全体を赤字体質にしている一因ではないかと思うのですが。

森　確かにその通りですね。それが知事の「もったいない県政」の本質でもあろうかと思うのですが、しかし、議会では理解されにくいのではないですか。

嘉田　私たちは県民であると同時に国民ですから、国全体として安い方を選ぶべきだと思います。しかし、お叱りを受けました。

森　県の首長が何を言うかと（笑）。

嘉田　しかし、47都道府県の1を預かる者として、地域が自主的に、自立した方法を考えることが大切で、地方分権ではなく、地域主権だと思うのです。もったいない県政は、財政再建をめざしているんです。

幸せな生き方とは、百の姓（かばね）を持つ生き方

森　お聞きしていますと、知事の子育て論と県政論には、非常に共通したところがありますね。子どもの生きる力、県としての力、どちらも損なってはならない。その上でお聞きしたいのですが、これからの時代、どのような生き方が人間として幸せだと思われますか。

嘉田　それはもう、百の姓（かばね）を持つ生き方が、それに当てはまると思います。それぞれの持てる力を、本人が発揮できる生き方です。

森　なるほど。キーワードは、自立ということになるでしょうか。これは地

方の復権にも、そのまま当てはまりますね。最後にですが、M・O・Hの活動について、何かご意見をいただきたいのですが。

嘉田　21世紀の初頭に、山と湖の恵みが一体となった湖北から、企業人である森さんをリーダーとして生まれた。これは時代性と地域性の必然であったと思います。ということは存在価値があるのです。ですから、周りから何を言われようと、M・O・Hの精神を主張し続けてください。

嘉田知事 著書紹介

水辺遊びの生態学 ― 琵琶湖地域の三世代の語りから

- 発行所／農文協
- 価格／１８００円（税込み）
- 内容／滋賀県知事・嘉田由紀子が研究者時代に滋賀県中をくまなく歩いて調査した。住民三世代の持つ‘水辺で遊んだ記憶’から、現在の環境問題を鋭く解き明かす。キーは私たちにある。

「寝たきり老人」のいる国いない国

- 著者／大熊由紀子
- 発行所／朝日新聞社
- 価格／１５２９円（税込み）
- 内容／朝日新聞のジャーナリスト大熊由紀子が書き下ろした、「真の豊かさ」を問う一冊。「寝たきり」のなぞを解くと、お年寄り・障害・政治・文化・民主主義の限界にまで切り込む。熱い思いが伝わる。

森　わかりました。大変、心強いお言葉をいただきました。本日はご多忙の中、ありがとうございました。

嘉田由紀子

●かだ　ゆきこ＝1950年、埼玉県生まれ。1973年、京都大学農学部卒業。1979年より、家族で大津市に在住。1981年、京都大学大学院農学研究科博士後期課程修了。同年、滋賀県職員に採用。1982年琵琶湖研究所職員、1997年琵琶湖博物館総括学芸員、2000年京都精華大学人文学部教授、琵琶湖博物館研究顧問を経て、2006年7月より滋賀県知事に就任。趣味はカラオケ、孫と過ごすこと。特技は手打ちうどん、地図が読める。座右の銘は「まっすぐに、しなやかに」

森建司

●もり　けんじ＝1936年、滋賀生まれ。滋賀県立長浜北高校卒業。新江州（株）代表取締役会長。滋賀経済同友会特別幹事、滋賀経済産業協会副会長など
著書／「吃音はなおる」遊タイム出版、「循環型社会入門」新風舎

●対談　郷 通子　vs　森 建司

国立大学法人お茶の水女子大学 学長　循環型社会システム研究所代表

〈リーディング テーマ 2—お茶の水女子大　郷学長が語る　女性の力〉

leading theme 2—Ochanomizu University president talking womanhood

「生活」は、社会変革のキーワード

何をインプットして、どうアウトプットしますか？

日本で一番古い女子高等教育機関であるお茶の水女子大学に、平成17年4月から学長として就任された郷通子さんは、国内における生命情報学の開拓に、大きな実績を残された科学者でもあります。生命情報学を、生活とも結びつけて使いこなせる女性人材の育成に力を注がれる郷学長と、21世紀の社会に女性のイニシアチブを期待する森代表が、教育・科学・生活をテーマに対談しました。

■お茶の水女子大学　学長室
■2007年2月14日

大学改革の一つ「リベラル・アーツ」とは

森　我々からすると、お茶の水女子大学といえば、女性教育の最高峰というイメージがあります。その大学のご出身である郷先生が生物物理学のご専門家というのは、異色のご経歴なのでは？

郷　私は大学では物理を学びましたが、その間に外部から来られた大沢文夫先生（大阪大学・名古屋大学両名誉教授）の講義を聴く機会がありました。大沢先生は、国内における生物物理学のパイオニア的存在で、筋肉収縮のメカニズムを研究しておられましたが、その研究に興味を持って、私も同じ道へ進もうと、大学卒業後に名古屋大学の大学院へ入ったのです。ですから私は、ここから飛び出した学生と言えます（笑）。

森　先生が、またこうして母校に戻られたことで、学内に新たな学問の土壌が培われるのではないですか。あまり難しいことは言えませんが、社会を引っ張っていくような女性の育成に、科学的な学問の要素が加わる。これは、文系と理系の融合ですから、「総合」ということになると思うのですが、私はこの総合というキーワードに、実は非常に注目しているのです。

郷　森さんの言われる総合とは、「リベラル・アーツ」に近いと思うのですが、このリベラル・アーツを、本学の学部でも来年度から、本格的に取り入れていこうと思っています。リベラル・アーツとは、あえて日本語で言うならば、「教養教育」に当てはまるでしょう。それを言うと、昔の教養部のイメージを抱かれる方も多いと思うのですが。

森　教養部というと、大学に入って、まず政治や法律、哲学、歴史などを幅広く学ぶ、その過程ですよね。

郷　そうです。しかし、その過程があると、学生たちがみんなのんびりしてしまって宜しくないというので、ほとんどの国立大学で、10年ほど前に廃止されてしまいました。しかし、その結果、何が起きているかというと、最初から専門的な講義が行われ、教養を勉強しない、身に付ける時期がないという事態を招いています。

森　教養というのは、知識のバランスを磨く学問だと思うのです。このバランスを欠いたまま、知識を専門化していくというのは、どうもおかしな話だと思うのですが。

郷　言われる通りです。例えば地球環境問題にしても、これから人類がどうすれば良いのかを探るには、倫理や歴史といった幅広い分野を学ばなければ、土台がしっかりとしません。

森　そうですよね。バランス良く学ぶことで、人間として精神的にも成長するのではないでしょうか。私の意見ですが、昔の大学生は、今より大人びた印象がありました。それは、精神的な成長が、態度や仕草に表れ、大人の仲間入りをしていったからだと思うのですが。

郷　少し話が逸れるかもしれませんが、私も日本の伝統の良いところは、礼儀だと思っています。先の大沢先生の師にあたる方で、日本の生物物理学の始祖とも言うべき小谷正雄先生（東京大学・東京理科大学両名誉教授、故人）という方がおられました。小谷先生は、国際会議等で外国の方々を迎える際も、座敷の畳に手をついて、きちんとご挨拶されました。そのお辞儀の作法がと

ても美しくて、その姿に私も見とれたのですが、外国の方々も、口々に賞賛されました。外国の方の目から見ても、美しいものは美しいんですね。そういった所作は、小さな頃から家庭で厳しく躾けられてこそ形になるものです。躾する家庭の姿も含め、日本の礼儀作法は、世界に誇るものなのです。お茶の水も、高等師範学校と呼ばれた時代には、そういうことを教える大学でした。しかし、私は新制大学になってからの卒業生ですから、その頃にはそういう古いものが一切あってはならない、という雰囲気の中で学んだのです。

森　それが新しいものを求めるということにつながったのでしょうが、古いものは一切合財駄目というのも、今となれば間違いであったのかもしれませんね。

郷　ええ。ですから今の時代に、良妻賢母と言うつもりは全くないのですが、もし言うなら「良妻良夫」。そういう社会にするために、どうしたらよいかということも、学問の体系に取り入れるべきでは、と思います。リベラル・アーツの話に戻りますが、例えば理系の学生でも哲学を学ぶ。歴史も必修にしようと考えています。専門の知識を学んでいても、それだけで世の中が理解できることにはなりませんから。私は女性にも、社会でリーダーシップを発揮してほしいと思っているのですが、そういう人間にこそ、視野の広さが求められるのです。

教育機関の研究現場に求められる長期的な物差し

森　先生のご専門である生命物理においても、そういう視野の広さが求められると思うのですが、現状はどうなのでしょう?

郷　視野が狭いとは申しませんが(笑)。ただ、例えば人ゲノムがここまで解析されてきて、それによって、新たな生命観が獲得されようとしています。ゲノムが私たちに何を与えてくれたかというと、テクノロジーの進歩ということも勿論ですが、「私たち人間とは何か?」という問題を与えてくれたことが、とても大きいと思うのです。しかし、

「良妻良夫」を育む教育をめざしています

森　テクノロジーを入り口にすると、人間とは何かという問題が、同じ土俵では語られないんですよ。そこに我々一般の人間が、科学を懐疑するというか、敬遠する理由があるとも思うのですが。

郷　おっしゃることはよくわかります。しかしそれは、難しいもの、複雑なものを、普通の言葉に置き換えるトランスレーターの部分が、不足しているからだとも言えます。また、科学のみならず、今の研究の在り方は、分析的であり、しかも短期的です。それには評価のなされ方も関係していて、大学もそうですが、1年なり3年の間に、どれだけの論文を書いたかということに重点が置かれています。そういう評価もあって良いのですが、それだけではなく、どれだけ広い視野で教育を行ったか。私は、この教育という物差しを、持ってこなければならないと思います。教育というのは、実際のところ、5年、10年と時間がかかります。もしかしたら、人の一生を通じて、30年、50年とかかるかもしれません。それだけ長期的なものを評価するというのは、難しいかもしれませんが、そういう評価の仕組みが必要ではないでしょうか。

それについては、あまり多く語られていないので、私は非常に残念に思っているのですが…。ゲノムを通して、生き物は皆、つながっているのです。根っ子は皆、同じでありながら、それでいて同じ人間は一人といない。これは凄いことです。

皇室との縁を資料館で見せて頂きました

森　教育という物差しも非常に人間的であると感じますし、先ほど言われた良妻良夫、これはまさに人間、そして生活の在り方を示唆するものであると思います。先生のように科学の第一線におられる方が、それを学問のすぐ近くで考えておられるというのは、非常に喜ばしいことです。

命と生活、双方の「知」をめざして

森　ところで、私は生活の主役を、女性であると考えているんです。やはり、地に足をつけ、子どもや孫の世代まで考えるのは、女性志向ですから。これからの時代、ぜひ、女性に社会のイニシアチブをとっていただきたいと思うのです。

郷　やはり女性というのは、子育てを経験しますから。命を育てることほど、生き物の根源を感じることはないのです。命を育み、それを繋げて生きていることを、全身で感じるわけです。私も教育者として、この大学に来て、特にそういうことを考えた上で、大学とは人を育てるところであり、育てるとは命と生活、双方の「知」をめざすことであろうという結論に達しました。それが、本学のキーワードであろうかと思います。ひと昔前、本学のような女子大学には、家政学部という学部がありました。衣・食・住について、花嫁修業をするところと思われる方も多かったと思うのですが、考えてみれば、それは命を育てること、生活を通して世の中を眺めるということ、そのための術であると思うのです。中でも一番大切なのは食についてだと思いますが、食というのは、環境問題もそうですし、教育問題にもつながっています。食をたどれば、日本の伝統文化や精神文化にも行き着きますから、おそらく、現在の社会問題の大半を内包していると言えるのではないでしょうか。

命を育てることは、全ての社会問題を内包しているのでは…

森　同感です。生き物の根源を感じるという、その感覚を女性が持っているからこそ、食や生活を通して、現代を捉えること、そして次の世代を考えることができるのだと思います。そこが男性と違うところで、男性は、俺が生きてる間は、金を儲けて、家族を養って…と、現在の経済社会を象徴するような発想になるんです。

環境問題も含めて生活に結びつく科学技術の形成を

森　M・O・H通信では、環境生協の理事である藤井絢子さん、滋賀県知事の

嘉田由紀子さんにお話を伺うことができました。今号では、郷先生にご登場いただき、まさに社会のリーダーとして活躍される女性三傑だと思うのですが、お三方とも大変な状況の中で、子育てをしてこられたという共通点があります。多分、当時は、女性がそこまで頑張るのは如何なものか…という風潮だったと思うのですが、そこまで頑張られたのはなぜですか?

郷　多分、お二人をはじめ、今も現役で活躍される同世代の女性には、共通するところがあると思うのですが、そんなに大変な思いをしているという感覚は、あまりないのです。能力がある人でも、周囲の状況が許さなかったから、何かを断念せざるを得なかったという人が大勢おられると思います。その中で、現役でいられ続けたということは、非常に幸せなことだと思うのです。私も、子育ての時期は、頼める人には誰でも頼むと、かなり図々しいお願いをしてきました（笑）。ですから、その時の分をお返ししなくちゃという思いが強いのです。

森　学長としての責任なり、研究の成果なり、もう充分にお返しされたのではないですか（笑）。さらに今年1月からは、内閣府に設置された総合科学技術会議の（有識者）議員にも加わられましたね。よくぞ大役をお引き受けになったと、私は心から感心するのですが。

郷　今の立場で私の役割は、女性が生き生きと、充分に持てる力を発揮できるよう、様々な仕組みをあらゆる手段で整えていくことだと思っています。議員をお引き受けしたのも、結局はそのためです。

森　同会議は、科学技術による知の創造と、それによる国際競争力の引き上げを目標に掲げていますね。それだけに議員の中には、科学は経済のためのものと考える人が多いと思うんです。そこに私は、アンチテーゼとして、科学は生活のためのものという思想を、ぜひ盛り込んでいただきたい。その役割を先生にご期待する一方で、その声は、多分なかなか届かないでしょうから、先生にとっては、ご苦労が増えるのでは、とも思うのですが。

郷　確かに、声は届きにくいかもしれません。でも、言い続けていかなければならないんです。科学を経済だけでなく、環境問題も含めて生活に結びつけて形成しようというのが森さんのご意見ですよね。そのために、女性のイニシアチブが必要になると思うのですが。そこでまず、女性への支援策を要求するのは、若い時はやりにくいものなのです。

科学は生活のためにある

各階廊下
モダンな意匠

大学会議室（貴賓室）

重厚な階段

なぜなら自分のことを主張することになりますから。例えば、子育ての最中にある女性が、子どもは人類の宝だから、社会全体で子育てすべきだとは、言いにくいですよね。それは、ある立場、ある年齢になったときに、声にしやすくなるのです。それこそが、私の役割だと思っています。それと、過去にですが、優秀な女性研究者であっても、育児休暇を取った時点で、国からの研究費用がカットされるということがありました。出産イコール病気と見なされるのです。病気でカットというのもそもそもおかしな話ですが、出産は病気じゃありません。それに対して、私はおかしい、間違っていると言い続けたのですが、沢山の人から同様の声が上がったこともあって、国の政策につながり、事態が改善されました。要は、沢山の人の声がある中で、どこか肝心なところではっきりと主張すること。そうすれば、国を動かすことも可能だということが、この時の経験でわかったのです。ですから、やはり言い続けないと…。産業の発展だけでなく、環境問題を優先した科学技術の方向性について、少なくとも直接、総理をはじめとした閣僚の前でお話するチャンスがあるのです。そのチャンスを活かすことが、今一番の課題であり、それが国の施策にどこまで反映されるかが、次の課題でしょう。地球温暖化も、予想以上の速度で進展していますから、議員の中には、環境問題を最優先すべきという意見の方も、嬉しいことにおられるのです。

森　せっかくの機会ですから、お聞きしたいのですが、科学的な見地から、地球温暖化がこのまま進行すれば、いずれ人類は、人口の縮小というか、減少期を迎えるのでしょうか?

郷　日本では少子化が進んでいますが、世界全体から見れば、まだまだ人口は増加するものと思われています。しかし、地球環境問題が、砂漠化や異常気象として顕著になれば、おそらく急激な食糧問題を招くのではないかという懸念があります。私が食が一番大切だと言うのも、食を通してすべてが崩壊する可能性があるからです。ですから私たちは、贅沢するのではなく、健康に生きていける範囲内に、食を縮小させる方向に向かうべきです。おそらくエネルギーも、同様のことが言えるでしょう。

創立130周年を迎えた
お茶の水女子大学

幼稚園の教室

森　そうでしょうね。例えばお金を出して買うお弁当でも、過剰な選択肢を作りすぎなんです。極端に言えば、お腹が空いていたら、何でもおいしいんですから、逆にお弁当を売る側は、今日の自信作はこれですと、厳選してもらってもいい。私は、そういう仕組みの「もったいない市場」というのを、実はこれから手がけていきたいと思っているのですが。

郷　それは素晴らしいことだと思います。やはり、ここまでで我慢しようというラインが、絶対に必要なんです。それを日本人は、もったいないの思想として持っていたのですから、それを取り戻して、世界に発信すべきだと思います。

今、家庭の中からできること
――政治を考える、家庭教育を見直す

森　最後にお聞きしたいのは、本誌の辻村編集長もそうなのですが、母親として、生活者として、地球環境の危機もわかった、社会の在り方を変えなくてはいけないということもわかった。では、そこで果たして、自分たちに何ができるだろうということです。ぜひ、先生のご意見を頂戴したいのですが。

郷　どれぐらいのタイムスパンで申し上げるかが難しいのですが、まず、有権者として政治を変えなければならないということが一つあります。私は、環境問題は、そう楽観していちゃいけない、あまり時間はないと思っています。それは皆さんも思っておられるでしょうが、それがなかなか、特に政治の表舞台に出てこないのです。

森　そうなんです。しかしそれは、この国の経済よりも、環境問題を優先するような政党がない、ということも関係していると思うのですが。

郷　確かにそうです。投票したい政党がないのです。つまりリーダーがいない。日本の最大の問題はそこで、多分それは、教育の問題でもあるのです。私たちの世代は、戦後の敗戦ムードから抜け出すために、とにかく何かやらなくちゃと走りに走って来ました。そしたら、どうも行き過ぎてしまって、私たちの世代が今の社会を作ったと言われれば、その通りなのです。反省も必要ですが、それに気づいたのですから、今からでも何ができるかとなると、二つ目は教育です。家庭で今すぐにやらなければならないことは、それこそ「もったいない」を教えることであり、ご飯粒を残しちゃいけないとか、そういう基本的な躾だと思います。

森　おっしゃる通りです。しかし、今の子どもは、親の言うことをなかなか素直に聞かない。難しいんです。

郷　わかります。本当はゲーム機だって買い与えたくないけれど、お友達はみんな持っていると言われたら、親が折れてしまうんです。私自身もそうでしたから（笑）。難しいかもしれませんが、でも多分、そこなんです。もったいないことをしちゃいけないとか、弱い者いじめをしちゃいけないとか、そういうことは叩いてでも教えなくてはならないのです。ですから私は、娘にも必要であれば孫のことを叩きなさいと言っていますし、祖母として叩きます（笑）。叩くのは絶対に駄目、子どもの自主性を伸ばすために、やりたいようにやらせるべきという説もありますが、これは間違いです。やりたいようにやることが、自主性ではないのです。

森　ところが、今は保護者もそうですが、それに論理的な説明を求める風潮があると思うのです。そうなると、こちらは黙ってしまわざるを得ないのですが。

郷　それは論理的に説明できないことなのです。本学に『国家の品格』（新潮社）の著者でもある藤原正彦教授がおられます。藤原さんは数学者ですが、彼も「論理は駄目」という意見の持ち主です。世の中には論理で説明できないことが沢山あるじゃないですか。弱い者いじめが駄目なのも、ご飯粒を残しては駄目なのも、論理ではないのです。この国の伝統的な思想、精神美だと言えるでしょう。それを教えるのは、私は3歳までと言っているのですが、藤原さんは6歳までと言っておられます。遅くとも9歳までには、駄目なものは駄目と親が教えるべきです。それを抜かしては、いけないのです。

森　これを読んで、安心されたお母さん方も多いと思います（笑）。それで子どもと喧嘩になったっていいんですよね。子どもだって、いつかはわかる時が、必ず来るんですから。今日は生活における「知」というものが、引いては社会を変える力になることを教えていただきました。お忙しいところを、本当にありがとうございました。

日本の歴史が刻まれた学舎にて

郷通子

●ごう　みちこ＝1939年生まれ。62年お茶の水女子大学理学部卒業。67年名古屋大学大学院理学研究科（物理学専攻）修士課程修了（理学博士）。専門は情報構造生物学、生物物理学。特に、タンパク質の部品構築とデザイン、ゲノム情報の構造機能解析と細胞ネットワークなどに関心を持つ。米コーネル大学、九州大学、名古屋大学、長浜バイオ大学（サイエンス学部長　※現在、特別客員教授）を経て、2005年にお茶の水女子大学の学長（女性として二人目）に就任。今年1月からは、総合科学技術会議の議員としても活躍。プライベートでは、一女一男の母。

森建司

●もり　けんじ＝1936年、滋賀生まれ。滋賀県立長浜北高校卒業。新江州（株）代表取締役会長。滋賀経済同友会特別幹事、滋賀経済産業協会副会長など
著書／「吃音はなおる」遊タイム出版、「循環型社会入門」新風舎

ニュースレポート1

島小学校の子どもたちによる自治
みんなが主役だから「学校って楽しい！」

上段左から、辻さん、中江さん、坂さん、下段左から、西川さん、山本さん

news report 1
Shima elementary school student counell

～子ども参加の学校づくり～
近江八幡市立島小学校

近江八幡市の島小学校は、全校生徒131名。各学年1クラスづつという、こじんまりした学校です。都会の学校に比べると、学力や体育力に秀でるものはないかもしれません。しかしこの学校には、全ての子どもたちが「学校って楽しい!」と思えるような、子どもたちが主役となれる取り組みが盛んに行われています。自分たちで考え、実践して、毎日の学校生活を楽しく過ごす島小の子どもたちは、みんな活き活きとした笑顔が印象的。そんな学校づくりを支える運営委員の生徒さんたちに、島小学校の活動内容や魅力について語っていただきました。

苦労して執筆してくれた原稿

見渡せる校舎

子どもたちが作成した権利憲章「平和な島小の宝物」

島小には、子どもたち自らが作った権利憲章がある。前文には〝決して「いじめ」「なかまはずれ」「暴力・言葉の暴力」などで脅したり解決したりしない（～中略～）〟とある。どんな子でも意見を出し合って、誰もが楽しい学校生活を送れるように、いつでも力を合わせて努力する。そのための掲げられたのが13条の権利憲章。

憲章といっても、その内容はとてもシンプルで解りやすい。例えば「島小の子どもは、分からなかったらみんなに教えてもらうなど、学習できる権利がある」「島小の子どもは、みんなと自由に楽しく遊んだり、休む権利がある」「島小の子どもは、一人で大変なとき、いつでも助けてもらいたい時に、みんなに助けてもらい、最後までやりとげる権利がある」など。どれも当たり前のようであるが、この内容を具体的に島小ではどのように実践しているのだろうか。

憲章の前文にもあるように〝どんな子でも意見を出し合える〟場所として、

島小では子どもたちによる児童総会が随時開かれている。「島小の行事がある時はもちろん、日常生活のちょっとした問題まで、あらゆる事を児童総会で話し合います。権利憲章の内容についても、児童総会で決めています。みんなの憲章にするために、みんなで納得するまで話し合うのです。一年生から六年生まで平等に、たくさんの質問や意見を言い合うので、いつも時間が足らなくなるんですよ…」そう話すのは、運営委員の山本沙依さん。まとめる苦労も並大抵ではない。先生の力を借りながら、子どもたち自身が主役となれる学校づくりを目指している。

この憲章、元はある年の六年生が作ったものだそうだ。六年生が卒業する際、在校生たちがこれを"先輩からの贈り物"として受け取った。壁に掲げられただけの憲章にならないよう、一年生から六年生まで、全ての学年でも解りやすく実践できる内容にリニューアル。児童総会で話し合いながら、みんなの意見を取り入れた条例が完成した。新しい憲章は「平和な島小の宝物」という愛称で、大切に受け継がれている。

みんなのアイデアがいっぱい！ 史上最高の島小子ども祭

毎年11月になると「島小子ども祭」が開催される。運営委員会を中心に、企画から出店準備、宣伝方法、スケジュール案にいたるまで、全て子どもたちが主催の手作りイベント。見に来てくれる人はもちろん、子どもたちも先生も、みんなが楽しめる"史上最高の子ども祭にしよう"が合い言葉。どんなお店を出そうか、どんなポスターを作ろうか、いざ準備が始まると、子どもたちを待ち受けるのは試行錯誤の毎日…その苦境を乗り越えて、工夫を凝らした企画や面白いアイディアが次々と生まれてくる。

「私たち六年生は、学校の横にある畑で有機農法のニンジンやカブを育てたんです。これらの野菜を使って、カブラのポタージュスープやニンジンジュース、千枚漬け、肉じゃがのカブラ風を作り、子ども祭りでこれらの料理を出店しました」と笑顔で語ってくれた辻里佳さん。「夏休みに種をまき、毎日草むしりと水やりをして…収穫した野菜で作るメニューを苦心して考えました。当日はたくさんのお客さんから『美味しい！』と言ってもらえた時は凄く嬉しかったです」農家の方から野菜作りを学び、カブラのポタージュスープはホテルのシェフに味を教えてもらったという本格派。素材から料理レシピまで、様々なジャンルのプロから教わったことは、何より貴重な体験になったに違いない。

工夫をこらした看板の数々

島小子どもまつりの伝統が誕生 ”八ちゃんのポン菓子屋“

昨年の子ども祭で、島小らしいエピソードがあるそうだ。「昨年、六年生だった八田翔平君が ”ポン菓子屋“ を出店したんです。好評だったこの店を、今年だけで終わらすのはもったいない…そんな思いから『来年はお前に任せる！』と、一緒に店を出していた当時2年生の杉原君にポン菓子屋を引き継いだそうです」

「爆発ポン菓子」のれん

突然後継者として任命された杉原君は、それからポン菓子について色々調べ始めることになった。数々の苦労があったそうだが、最大の難問は、ポン菓子の原料となる米。「学校で米作りをしている五年生がいなくては、ポン菓子屋は出店できないそうです。杉原君は毎日休み時間を返上して、一緒に店を出してくれる五年生に協力を呼びかけました」八田君の願いが叶い、杉原君の熱意と努力のおかげで、今年も無事にポン菓子屋を出店することができた。初代オーナーの愛称から、その名も「八ちゃんのポン菓子屋」。これからも島小子ども祭のお馴染みとして、引き継がれていくことだろう。

島小こども祭では、毎年新たな企画を考える楽しみもあり、「八ちゃんのポン菓子屋」のようにひとつの事を継続していく事の大切さ、喜びを感じることもできる。学年を超えたつながり、地域の人々との交流こそが ”史上最高の子ども祭“ を成功へと導いてくれるのだ。

島小の事、毎日伝えて300号突破！ 日刊紙「Wing～はばたけ～」

島小の日刊新聞「Wing～はばたけ～」には、学校の行事、校内ニュースなどが載っている。他にも委員会からのお知らせや生徒のインタビュー記事、時には4コマ漫画も登場するなど、内容はバラエティー豊か。

この日刊紙を手掛けているのも、島小の子どもたち自身。発刊当初、6年生だけの学級新聞を作ろうとしていたが、児童総会で「私も新聞を一緒につくりたい！」と手を挙げたのが、当時●年生だった坂亜歩さん。その一言をきっかけに、Wingという名で全校向けの日刊紙が誕生した。「全校から誰でも好きな人が入れる ”Wing係“ は、現在一年生から六年生まで、総勢23人が参加しています。取材から原稿書き、印刷まで毎日全校に配り続けて、とうとう300号を突破しました！ 私たちが卒業しても、ずっと続いてほしいですね」

坂さんをはじめとするWing係は、書いている人も、読んでいる人も、みんなが楽しめる紙面づくりを心掛けているそう。Wingの名の通り、翼を持って伸びやかに羽ばたく子どもたちの姿、活き活きと過ごす楽しい毎日が紙面にぎっしり詰まっている。

“Wing”300号の数々

子どもの目線から書かれた記事を通じて、「こんな事が学校であったんだ」「みんなはこんな事を考えているんだ」「子どもたちはこうやって学校を楽しんでいるんだ」そんな風に、子どもたちも先生も保護者も、島小の事を一層身近に感じることができる。みんなが興味を持つこと、共感し合うことで、一層学校に親しみが沸くのだろう。

島小学校の取り組みから学ぶ“真の人間教育”とは

今日の学校では”よい大学・よい企業“に入るための学習に力を注ぎ、”よい人間・よい人生“になるための学習が疎かになっているのかもしれない。「ゆとり教育」として学習時間を設けることよりも、日頃の学校生活の中、行事の中から、子どもたちが自然と学べる形でなければ、意味がない。

島小学校には「ゆとり教育」の時間は必要ないかもしれない。権利憲章のように、子どもたちを尊重する決め事がある。児童総会のように、自分たちで意見を交わす場所がある。子ども祭のように、自分たちで実行できる機会がある。「Wing」のように、継続していくものがある。みんなが主役となれるから「学校って楽しい」と感じる魅力があるのだろう。

学年の垣根を超えたつながりの中から、高学年から低学年への”思いやり“を育み、低学年から高学年へは”信頼関係“が生まれる。様々な学びの中から失敗し悩み、励まし合い、そして復活し、達成することの感動を皆で分かち合う。こうした共生の在り方が、”真の人間教育“を引き出してくれるのではないだろうか。

●近江八幡市立島小学校＝所在地／近江八幡市島町1603番地
二〇〇六年度六年生有志

ふれあい

第六回

『さくら』

中井 二三雄

中学校から、町はずれの桜公園に遠足に行きました。

桜の番人と名乗るおじいさんが、公園の説明をしてくれました。

〈昔は何にもないところだったが、62年前戦争の終わったある日、足の悪い一人の青年がここに住みついたんじゃ。粗末な小屋に住みながら、「人の心をやさしくする桜並木を作ろう」と、桜の木を植えだした。何日も、何年も。一人でただ黙々と。いつしか桜の木は大きくなり、蜂や小鳥や動物たちも集まり、近くに人も住むようになった。現在では、町のみんなの憩いの場所になったんじゃ〉

これだけ言うと、おじいさんは不自由な足を引きずりながら、森の奥へと消えていったのです。

「あのおじいさんが、桜の木を最初に植えた青年だったんだ」と、確信。

ぼくの心には、昨日、学校で習った芭蕉の句が浮かんできて仕方がありませんでした。

〈さまざまな事　思い出す　桜かな〉

●なかい　ふみお＝1949年、守山市生まれ。広告・出版・映像関係の仕事を経て、1976年から著述業。滋賀県文化振興事業団発行「湖国と文化」編集長。大津市在住。

ニュースレポート 2
長浜農業高校　未来の農業

「農」を学ぶハイスクール！

広大な農場の中に校舎が建つ

news report 2
Nagahama agricultural high school / agriculture of promising

県立長浜農業高等学校の取り組み

農業の在り方に、自給自足や地産地消など様々な期待がかかる中、次代の担い手を育てる農業高校では、どのような教育が行われているのでしょう？　一世紀あまりの歴史を誇る県立長浜農業高等学校を訪れ、お話を伺いました。

冨田酒造で販売されている
「長浜農高育ち」

次代の「農」を担う農業高校の今は？

明治29年（1896）に滋賀県蚕糸業組合立簡易蚕業学校として開校され、今年で創立108年を迎える滋賀県立長浜農業高等学校。最大の特徴は何といっても、その広大な校地面積だ。普通校のおよそ3校分に相当するという20ヘクタール余りの敷地は、県内最大規模であるのはもちろん、近畿地方でも3本の指に入るという。草花と野菜それぞれの園と温室、果樹園、水田、さらに学科ごとの圃場など恵まれた施設環境の中、現在420余名の在校生が生物活用科・ガーデン科・食品科学科・環境デザイン科の4学科に別れ、特色ある高校生活を送っている。農業経営の多様化に併せ、今から7年前に学科の改編が行われた。中でもガーデン科は全国初の学科として注目を集めている。

「ひと昔前なら農業土木と呼ばれた学科も、現在は環境にまで視野を広げた教育が行われています」

こう語ってくれたのは、同校農場課の沓水節夫教諭（58才）だ。時代の変化につれ、農業に関する学問も新たな体系を必要とする中、農業高校は次代の「農」の担い手たちを、いかなる方向へ導こうとしているのだろうか？

日本酒、シュークリーム、「長農」メイドの数々

「特に力を入れているのは、生産実習を通した専門技術の育成と知識の修得、さらに経営についてを実践的に学ばせることです。本校では昨年度の生産物収入が3500万円にのぼりました。生徒たちに常に言っているのは、『いいものを作れば必ず高く売れる、いいものを作るには高い技術が必要だ』ということです」

同校では実習で生産した米を東京・大阪の業者と直接取引するほか、県内の複数の商業施設にも野菜・花等を出荷している。また、長浜市と契約を結び、豊公園や長浜ドーム、JR田村駅前の花壇の植栽を手がけるのも同校の生徒たちだ。昨年は生物活用科の生徒たちが初めて酒米づくりに挑戦し、収穫した1・4トンの酒米を伊香郡木ノ本町の冨田酒造が日本酒に加工して、『長浜農高育ち』の名で現在、販売されている。最近では米原市（旧山東町）の山東商工会より共同開発の依頼を受けて、食品科学科の生徒たちが当地の名産品「まくわうり」を原材料に使用した「まくわシュー」を開発するなど、地域と連携した学習活動を上げるときりがない。

「様々な活動や経験を通じて、農業高校の可能性を開花させたいと思っています」

「長浜農高は日本有数の高校です」と沓水先生

加工品の販売には長蛇の列

沓水教諭も4月の「長高苗市」や11月の「長農花市」など、近隣住民等を迎える学校行事の際には、前日夜、生徒ともども徹夜で販売用の加工品（パン、シュークリームなど）作りに追われるのだとか。自分たちが作った2000個余りのシュークリームが、わずか2時間余りで完売する。それを目の当たりにした生徒たちの感動は大きいという。

「粉も卵も最高の品質のものを使っていますから、長農のパンやシュークリームが美味しいのは当然なんです」

長農メイドの加工品は地元でも定評があり、行事当日には長蛇の列ができる。

経営から起業まで、農業の自営を学ぶ

在校生の半数近くは、実家が兼業農家の生徒だ。しかし、将来的に農業自営者をめざす生徒は、意外と少ないという。それには、滋賀県の農業事情も大きく関係している。滋賀県の農業所得は全国で最低クラスだが、農家総所得は全国第4位にランクインしている。つまり、会社勤めや自営業をしながら、先祖から受け継いだ田んぼを守るため、米作りを副業とする兼業農家が圧倒的に多いのだ。現在、県内の4万5000戸余りの農家のうち、約95%を兼業農家が占め、残り5%に当たる少数の大規模、専業農家と二極化が進みつつある。

「昔であれば、実家の農地を土台とした後継者づくりが望まれましたが、現在は農業の法人化も進み、新たなスタイルでの後継者育成が求められています」

卒業生の中には、何の血縁関係も無しに、後継者不在であった県内の観光果樹園の経営を引き継いだ者もいる。こうしたケースが農業従事者の高齢化と相まって、今後、増加すると予測される。収益性や生産性など農業をビジネスとして確立できる人材の育成に期待が寄せられている。

そこで、同校では現在、経営から起業までを想定した実践型の学習活動が活発化している。その一つが、長浜バイオフラワープロジェクト実行委員会（長浜商店街連盟、長浜観光協会、長浜市、長浜バイオ大学で構成）との連携だ。同委員会では、昨年より長浜サイエンスパークを中心とするバイオクラスター（※集合体）の形成に向け、「長浜発・バイ

笑顔で販売の長農生

並べるそばから売れていく野菜苗

オで活きる花・まち・産業プロジェクト」を展開中だ。サントリー㈱が開発した「エコパフ」（※土を使わない人口培土。本誌12号で紹介）を利用してJR長浜駅の自由通路に花のオブジェを展示するほか、同社が遺伝子組み換え技術で開発した紫のカーネーション「ムーンダスト」を、10月に開催された「きもの大園遊会」の参加者にプレゼントするなど、バイオテクノロジーのPRに努めている。

その一環として、サントリーと地域が連携し、黒壁スクエア周辺の店舗に、エコパフを利用した水槽型のプランタをレンタル契約制で設置してもらうプロジェクトが進行中だ。

「その水槽型プランタのメンテナンスを引き受ける企業を、生徒たちの中から役員、社員を選出して、長農で立ち上げたいと思っているんです。もちろん、長浜市とサントリー㈱のバックアップを受けてです。業務としては、年3回程度の花の植え替え作業と、週1回の定期メンテナンスです」

机上で学ぶより、実際に金銭が動く仕組みを目の当たりにした方が、経営を理解する一番の早道になると、同校ではビジネスプランを着々と描きつつある。

「プランタに植えられるのは、サントリーのサフィニアという品種です。この花は10数年前に発売されましたが、市場価格が下がっていません。本当にいいものだから人気が継続しているんです。土を使わないという新しい農業技術とともに、こうしたマーケティング的な部分にも、生徒たちに目を向けて欲しいと思います」

このほか食品科学科では、地域の個人や企業等から出資金を募り、10平米の専用農地で野菜や草花を育て、販売する株式会社の設立を計画中だ。その際は、生徒たちの中から役員等を選出するほか、総会等の開催、さらに配当金として現物を株主に分配するなど、実際の経済の仕組みに基づき、会社を運営・維持する方針だ。

広い牧場に牛が集う

農業の可能性イコール自分たちの可能性

ビジネス型の学習活動もさることながら、同校では地域とのふれあいに重点を置いた学習活動も盛んだ。近隣の町の老人会や婦人会が開催する寄せ植え講習会やガーデニング講座の講師として、沓水教諭は「日程さえ合えばどこへでも行きます」と、これまでも積極的に取り組んできた。その際は、助手代わりに数名の生徒を同行させる。生徒たち若い世代との交流は、お年寄りにも大変喜ばれるという。

「生徒にもその日の報酬として、図書券で千円から二千円程度をいただきます。バイトをしている生徒もいますから、金銭感覚もありますが、それでも『こんなに貰っていいの？』と素直に喜んでいますね」

訪問先も、地域の小学校や介護老人施設など、様々だ。

「介護老人施設を訪問した際、気になったのが施設の2階におられる高齢者の存在でした。1階におられる方は戸外で園芸を楽しむ体力のある方が多いんです。しかし、上階におられる方はそういった活動も困難な方が多いんです」

そこで、沓水教諭が提唱するのが、土を使わないハイドロカルチャー（水耕栽培）だ。

「粘土を高温で焼いたハイドロボールという用土があります。無菌ですから、介護施設や病院の中に持ち込んでも問題はありません。ペットボトルなど容器詰めにしたハイドロボールを使えば、誰でも手軽に園芸が楽しめます」

園芸福祉や園芸療法といった言葉があるように、花や野菜を育てるプロセスを通じて、喜びや楽しみを共有しようという環境福祉が広まりつつある中、同校でも園芸セラピーガーデンの普及活動に取り組んでいる。

「活動の特色として、琵琶湖のヨシを活用しているんです。私の仮説ですが、ヨシには肥料を吸収する緩衝材としての働きがあると思います。ヨシを適当な長さに断裁して、鉢底に敷いておけば、排水性や通気性はもちろん、肥料が多すぎた場合はそれを吸収してくれます。何より、鉢やプランタの軽量化とコストダウンにつながるんですよ」

地域経済や地域の輪の中に入り込んだ活動を、沓水教諭は「生徒たちが楽しみながら」経験し、自身の糧としてくれることを期待している。生徒たちも自分たちの存在が、街を元気にし、誰かを元気づけることを、肌で感じているのではないだろうか。自分の中に秘められた可能性と農業の可能性に気づかせてくれる学び舎、それが今の農業高校の姿なのかもしれない。

沓水節夫

●くつみず　せつお＝昭和24年生まれ。昭和42年3月滋賀県立長浜農業高等学校農業科卒業。民間企業に就職後42年より長浜農業高校実習補助として勤務。昭和55年長浜養護学校教諭。八日市南高校を経て平成元年より長浜農業高校勤務。平成18年優秀教員として文部科学大臣表彰を受ける。

●滋賀県立長浜農業高等学校＝所在地／長浜市名越町600 〒526-0824
TEL:0749-62-0876

ニュースレポート3
彦根市橋本商店街の活性化

商店街の復活―キーワードは「人」のつながり

上田 健吉
株式会社千成亭　代表取締役会長

news report 3
activated Hikone city area

彦根市・橋本商店街の取り組み

一旦は廃れてしまった昔ながらの商店街が、今、再び息を吹き返そうと動き出しています。人間同士の触れ合いをキーワードに、高齢化対策にも目を向けた取り組みで、商店街が主体となった地域づくりをめざす彦根市の橋本商店街から、活動を手がけるメンバーのお一人、千成亭の上田健吉さんにお話を伺いました。

■2007年1月28日

「アーケードが出来て雨の日も安心」のどかな店頭

千成亭の前で上田氏

地方の商店街が、全国的に衰退する中で

彦根市の旧市街、朝鮮人街道の俗称で知られる通りに沿って、佐和町、京町、登り町、銀座、橋本と、複数の商店街が形成されている。その中でも一番の歴史を誇る橋本商店街は、彦根城築城（※1604年から築城が開始され、1607年頃には、天守が完成したとされる）の頃から、現在の原型となる「市」が立ち始め、活気を呈したとされる。昭和の初期には、その賑わいもピークに達し、遥か琵琶湖の対岸の安曇川方面からも、船で買い物客が駆けつけた。また、県下で初めてのアーケードが設けられたことも、同商店街の自慢の一つだ。

しかし、時代の移り変わりの中で、全国的な傾向として、旧市街の商業基盤は、衰退の一途を辿っていく。商店街に代わって、郊外に次々と誕生した大型ショッピングセンターが客足を集め、さらに旧市街の老朽化した建物や、駐車場の不足、狭い道路事情を敬遠して、若い世代の人口流出が見られるようになると、いわゆる「ドーナツ化現象」が、深刻な問題に発展していった。

朝鮮街道の道標

橋本商店街も、最盛期には38軒の商店が軒を連ねた。現在はその3分の1にも満たない10軒が、それぞれの家業の歴史を守っている。そのうちの1軒、50年余りの歴史を持つ「千成亭」（近江牛専門店）の会長・上田健吉さんは、「今が最後の頑張りどころ」と、商店街の復活に向け、様々な活動に取り組む一人だ。活動の目玉として、去年11月に、新アーケード建設事業が完成し、記念のテープカットが行われた。新しく完成したアーケードは、ファサード（景観）とともにバリアフリーの機能を併せ持つ。全国

同様のファサード事業が多数、行われる中、アーケードは、過去の遺物的に見なされ、新たな設置許可を得にくい状況にあった。しかし、上田さんらは、地域の高齢化を考慮して、あえて青焼き図の中に、アーケードを盛り込んだ。その意図が行政の目にとまり、実現の運びとなったのだ。こうした行政の補助事業を活用する一方で、商店街を主体とする取り組みは、どのように広がっていくのだろう？　上田さんに話を伺った。

人間同士の触れ合い、『愛しさ』を取り戻すために

「商店街には、目には見えないけれども、町衆が育んだ『地域文化』というものがあったんです。その文化が経済社会の価値観に押し潰され、商店街自体が疲弊しきっているのが現状だと思います。昔と大きく変わったと感じるのは、お客様の顔が見えないということ。人間関係が希薄になって、地域が分断されてしまったから、地域のお客様がどこの誰だか分からない。だから、声をかけることもできないんです。最近、"癒し"という言葉をよく耳にしますが、それは人間同士の触れ合いによってもたらされるもの。触れ合うことで、人間らしい感情も湧いてくるんです。私はそれを『愛しさ』と言っているんですが、お互いが、愛しさを持つためには、もっと人間同士が近くならないと…」

上田さんが言う『愛しさ』は、お客様への思いであると同時に、同じ商店街の仲間に向けた思いでもある。結成してまだ日は浅いが、昨年に「彦根橋本町協同組合」（稲垣宗一理事長・組合員21名）が組織化され、現在、組合を中心に「空き店舗活用事業」が進行中だ。空き店舗の再利用により、通りの一方ずつを、それぞれ福祉ゾーン、飲食ゾーンとするシナリオが準備されている。近い将来、それを実現に移すため、何よりも必要なのは、組合員相互との話し合いによる意志の疎通だと、上田さんは言う。

「愛しさは、絆になるんです。組合の仲間は、私も含めそれぞれがオーナーですから、一匹狼的なところもありますが（笑）。その中で同士の結束を固めるには、毎週でも毎日でも顔を合わせて言葉を交わす。結果そのウエイトが一番高くなる、自分たちが主体となって、何かを実現することは不可欠なんじゃないでしょうか。確かに著名なコンサルタントの話を聞くというのも勉強にはなりますが、それを個々の立場で行動に移すとなると、結局、我が出始めて、行き詰まる結果に成りかねません」

千成亭で継承される肉牛の解体技術も、現在では希少なものになりつつある。マイスターの育成にこだわり続けて来た中、昨年ドイツで開催された「SUFFA2006」（ドイツの食肉加工協会が主催する世界的な食肉加工品のコンテスト。ソーセージ類、ハム類、ベーコン類など、各部門で最高峰の技術が競われる）では、二人の若手社員が見事に金・銀・銅のメダルを獲得した

「まぁ、ええわ」に甘んじず、夢を語り会う

上田さんは、これまでの自身の経験から、商店街での商売が、陥りやすい危機をこう分析する。

「自分の店の中からは、前と両隣、近隣の店ぐらいしか見えません。そこのお店に、あまりお客様の姿がなかったら、自分のところも『まぁ、ええわ』となるんです。近隣への思いやりが、逆に仇になっているところもあるんですね。自分の店と同じ業種であっても、ちょっと視点を変えれば、高級感や雰囲気の工夫で、賑わっている店はいくらでもあります。それに気づくことが大切なんです」

ともすれば、ぬるま湯に浸かったままの状況になりがちな中で、商店街が息を吹き返すには、「夢を語り合う」ことが、一番だと上田さんは考えている。

「会社の経営にも言えますが、夢を語り、それを形にして、次代に伝えることこそ、今を生きる者の役割ではないでしょうか。そのためにはまず、自分が強くなることです。強くなるということは、まずは我武者羅（がむしゃら）に働くこと。それが技術や知識、知恵を、より高めることになり、その道を極めるということになるのだと思います」

上田さん自身も、近江牛の専門家として、営業努力や技術の修得だけでなく、近江牛にまつわる歴史を遡り、残された古文書にまで目を通したそうだ。江戸時代、彦根藩は唯一、公式に屠殺を許された藩であった史実など、日本の牛肉のルーツを発見することで仕事の面白みが増し、それが、仕事に対する迷いから自身を救ってくれたのだという。

「世の中に『三惚れ』という言葉があるのをご存知ですか？　仕事に惚れる、土地に惚れる、女房に惚れるの三つです。仕事に惚れるというのは、つまり極めるということ。私も、若い頃はなぜこんな仕事を…と思ったことがありましたが、学ぶこと知ることで、この仕事を極めたいという動機が高まりました。土地に惚れるというのは、会社でも店舗でも、自分が構えた土地の、値打ちを上げるような仕事をしなくちゃならんということ。女房に惚れるというのは、その言葉のまま、家庭円満が基盤になるということでしょう（笑）。とにかく、仕事をする上で大切なことは、自分が強くなければ、人に与えることも、伝えることもできないんです」

愛しさと強さ、そしてそれを与えること、伝えること。その言葉どおり、上田さんが今、最も力を入れているのが、人材の育成だ。商店街の復活に向けた努力も、引いては次の世代のための環境づくりにつながる、という思いが込められている。

「未来があるからこそ、夢を語る値打ちもあるんです。しかし、私たちの年齢層は、若い世代に対して、一歩引いてしまうところがあります。若い人と疎遠になってはいけないと自分にも言い聞かせるのですが、商売人や技術・技能者はなおさら、自分たちは培った技や知恵、さらに老いの知恵というものを継承していただかなくてはなりませんから。定年を迎えた世代には、同じことを考えている人も大勢おられると思います。その世代に、地域の担い手として、ぜひ立ち上がってほしいですね。そして、自分たちが、若い世代に伝えてほしいのです。そのためには、地域の商店街の色々な職種や業種が連携して、シニア世代に光を当てていけるような、仕組みづくりをめざしていきたいと思っています。何より必要なのは、やり甲斐や生き甲斐を得られるものであることでしょうね」

「自分が生きるのに必要な物は、そう多くはいらない」

商店街とともに、上田さんが今、気にかけているのは、農林業の現場だ。職業柄、安全・安心な牛肉の販売に力を尽くしてきたが、それは同時に、この国の農業や、自然環境に目を向けることへつながっていった。

「疲弊しているという点では、第一次産業も同じだと思います。私の家にも、多賀町に30数年来、守ってきた山があります。しかし、これ以上は守りきれないと、長らく放置していたのですが、幸い滋賀県の森林税の導入初年度に県民参加の「里山協定林」にしました。アウトドア人口の増加で、キャンプ場が全国的に不足しているらしいので、そうしたことにも貢献できればと思っています」

その協定林には、今春、広場や散策道が整備され、「富之郷里山クラブ」の活動拠点として、一般に広く開放される予定だ。

最後に、上田さんが地域の未来を考えるようになったきっかけを聞いてみた。

「お金でも物でも、自分が生きるのに必要な分は、そう多くはいらないんです。だったら、地域の方に喜んでいただけるように、少しでもお役に立てればという思いに目覚めたというところでしょうか（笑）。持続可能な環境づくりのために、少しでもお手伝いができれば幸いです」

今年、国宝・彦根城築城４００年祭（※今年11月25日まで開催）を迎えるにあたり、橋本商店街でも、１軒の商家が保存していた江戸から昭和にかけての引き札や藩札、写真、絵画を町中博物館で展示するなど、多彩なイベントを計画している。商店街の復活と、地域づくりを連携させる取り組みが、今まさに試されようとしている。

橋本商店街。毎月5の付く日に、川沿いの遊歩道をウォーキングする「けやき倶楽部」も発足し、上田さんをはじめ、現在50人程度がメンバーに登録している。ウォーキング後、千成亭の店内で憩うひと時も、倶楽部の魅力の一つだ。会費は無料で、健康維持と友だちづくりを目的に、気軽に参加を呼びかけている（※午前11時出発、7～9月は午前9時出発）

上田 健吉

●うえだ けんきち＝1936年生まれ。株式会社千成亭の代表取締役会長に就任。彦根市物産協会会長、彦根みやげ品研究会会長、彦根地域開発協同組合理事長等を歴任。

●株式会社千成亭＝健吉氏の父である上田豊吉氏が、丁稚奉公を経て昭和8年に神戸市内で精肉店を開業。その後、戦災の影響で滋賀県へ帰郷し、昭和23年に近江肉の販売店を開業。昭和30年に、父・豊吉氏とともに健吉氏が橋本商店街の現在地に出店し、屋号を「千成亭」とする。現在は、販売店（3店舗）と近江牛肉料理専門店（4店舗）を手がけ、平成12年、第10回優良経営食料品小売店等全国コンクール食肉小売業部門にて「農林水産大臣賞」を受賞（橋本店）。平成17年には環境マネジメントシステムKESステップ2の認証取得。
所在地／彦根市平田町808 〒522-0041
TEL.0749-26-2299

ニュースレポート4
エネルギームーブメント

もっと身近に、自然エネルギー

岡田　弘
ニューパワー有限会社

news report 4
Energy movement

そよぐ風、流れる水で携帯「発電」しませんか？

自然エネルギーの小型発電設備のうち、商用電源（電力会社の電力系統）のバックアップを全く頼らない独立型電源を「スタンドアロン型」と言います。今回、ご紹介する風力・水力発電機は、電力としてはわずかながら、作り手のスタンドアロンな姿勢が映し出されたような、発想のユニークさが光ります。

■2007年2月25日
■烏丸半島（草津市）

さっそうと自転車で移動

5分で風力発電器を組み立て

「自分の遊びに使う電力ぐらい…」の発想から生まれた、世界初の携帯風力発電機

自然エネルギーの後進国と言われる日本で、国の政策を尻目に、自前の風力・水力発電機を製作し、自身の生活に取り入れてきた人がいる。その人の名は、岡田弘さん(67)。今から11年前に起業した、風力発電機の製造販売を手がけるニューパワー有限会社（野洲市行畑）の代表だ。

きっかけは、趣味のアマチュア無線で交信時により電波を飛ばすため、山の上に場所を移す際、持ち運び可能な電源を確保したいと考えたのが最初だった。岡田さん曰く、

「自分の遊びに使う電力ぐらい、自前で調達したいと思ったんです」

岡田さんは、もともと機械関係の会社に勤め、手先の器用さには自信があった。「物づくりは手先の感覚から」というのが持論で、頭より手先で、素材や構造を考えながら、平成6年に世界初の携帯風力発電機を完成させた。

「持って運ぶという発想が珍しかったんでしょうね。世の中に無いものを作るのは、初めは難しいんです。でも、ユーザーは私自身ですから、開発方向はぶれません。とにかく軽くて、部品も最高の性能が得られて、加工も容易な方法をと考えながら、まず製作してから図面を完成しました」

モンゴルの大地を横断したNP—30A

完成した初号機をモデルとする軽量風力発電機NP—30Aは、秒速2メートル

ルの風で発電を開始し、最大出力は33ワット、重量は取付支柱も含めて3キログラムに抑えられている。この装置に太陽電池（ソーラーパネル）を組み合わせることで、全天候型の電源として使用することが可能だ。NP—30Aの本体価格は9万300円（税込み）で、これまで購入されたのは、教育教材を用途目的とするほか、磯釣りの際のクーラーボックスの電源など、車を横付けできない場所での活動に備えたケースが目立つそうだ。中でも、岡田さんにとって大きな喜びとなったのが、平成14年にホームページを通じて購入希望のあった東京都の鈴木勲さんのケースだ。鈴木さんは、NP—30Aと太陽電池を動力に利用した電動アシスト自転車で、同じ年の夏に向け、モンゴル単独横断ツーリングを計画中だった。装置の性能について問い合わせがあったため、岡田さんは早速、鈴木さんと同タイプの自転車を購入し、実際に装置を搭載して、検証テストを行ったのだという。

岡田氏のソーラー自転車が世界を巡る

小型水力発電

「それで『大丈夫です』とお返事して、7月20日に、鈴木さんがウランバートルを出発され、翌8月22日にゴール地点のホブドに到着されたんです。全走行距離は1550㎞です」

この旅の様子を、鈴木さん自らが綴ったレポート『モンゴル—風と太陽の旅』は、岡田さんが会員として所属する日本風力エネルギー協会の会誌に掲載され、協会の仲間内からもモンゴルを横断したNP—30Aに、高い評価が寄せられた。その後、岡田さんは軽量携帯型マイクロ水力発電機NP—50Aの開発にも成功。NP—50Aは、渓流や小川の流れの落差を利用し、30センチの落差から15ワットを出力する。最大出力は1メートルの落差で50ワット、重量は支持台を含め6・6キログラムだ。川底に機械を置くだけの手軽さが受け、アウトドア層を中心にジワジワと評判を呼んでいる。

青空授業で、自然エネルギーへの関心や興味を育てる

取材当日、待ち合わせ場所の烏丸半島まで、岡田さんは前述の電動アシスト自転車に乗ってやって来た。野洲市内の自宅から、所要時間は35分程度だという。荷台に取り付けたソーラーパネルを、走行中も太陽の方角に合わせて、手で向きを調整する。発電した電気は、前カゴに積んだバッテリーに一旦蓄えながら、それを動力にして自転車を走らせる仕組みだ。この日はこれから、

京都府立桃山高等学校（京都市伏見区）の地学部に所属する生徒さんたちを迎え、NP―30Aのデモンストレーションなど、自然エネルギーに関する青空授業が行われる。岡田さんは8年ほど前から、こうした野外での青空授業を、年に数回引き受けるようになった。

数分後、同校の村山保、中川雅博両教諭に引率され、総勢20名あまりの一行が到着。生徒さんたちの関心は、まずは電動アシスト自転車に集まり、早速、近くの道路で試乗会が始まった。「この出だしはすごい！」「めっちゃ軽い！」

「ソーラー自転車は軽快」と桃山高校生

と、賞賛の声が発せられる中、全員が自転車の乗り心地を体験。岡田さんから「時速20キロぐらいはすぐに出る」との説明を受け、村山先生の試乗時には、生徒さんたちから「20キロ！」コールが起こるなど、楽しい一幕も見られた。

この日の午前中は、あいにく風が弱かったため、青空授業は一旦風待ちをして、午後2時からの再開となった。その間、生徒さんたち一行は、水性植物園と琵琶湖博物館の見学へ。岡田さんは、「無線でもやりながら待ってます」と、その場に腰を下ろした。NP―30Aの機体に記された「JA3CKF」の文字は、岡田さんのコールサイン（※アマチュア無線局の国際呼出符字列）だ。

自分の遊びに使う電力ぐらい…という思いから始まった電気エネルギーへの取り組みは、今や多くの人に驚きや感動を伝え、地域や小・中学校をはじめとする教育現場からも、地球環境と未来の社会像を考える機会として大きな注目を集めている。日本の自然エネルギー政策は貧しいとも評価されるが、岡田さんの青空授業を体験すれば、少なくとも自然エネルギーについて、「見ると知る」の部分はリッチになるのではないだろうか。

烏丸半島に2台の風力発電機

岡田弘

●おかだ ひろむ＝1939年、滋賀県甲賀市生まれ。自然から力をもらう自然エネルギーの魅力に憑かれ、勤めていた会社を早期退職してニューパワー(有)を設立。携帯できる風力、水力発電機の開発に加え、展示会等への出品や講演など、自然エネルギーの普及活動に努める。国内はもとより、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、オランダ各国を視察し、世界の風力発電事情に知識を持つ。

●ニューパワー有限会社＝所在地／野洲市行畑2-10-13 〒520-2341
TEL.077-588-4405
http://www.ex.biwa.ne.jp/~newpower/

東側全景／「根曲がり杉」が北側の妻壁に見える。外壁は杉板の鎧張り及び漆喰仕上げ。屋根はいぶし瓦。設計当初より、この面からの外観を意識し平面を雁行させている。

建主の想いが、人と木と匠を集めた

news report 5
build my house a tree wood.

宮村　太
宮村太設計工房主宰、安曇川流域・森と家づくりの会代表

あなたは、どんな家に住み どんな暮らしをしたいですか?

家を建てることは、一世一代の大仕事。「家なんて一生縁がないわ」と思う御仁も・・・。いわんや、家はカタログと値段で決めると思っている人も多いはず。チョットまった。そもそも家は、近くの山から切り出した木を使って、棟梁が土地にあった暮らしやすい家をオリジナルで建てるのが、日本の慣わし。「そんな事いったって、今のご時世じゃ」という向きに、こんな事例もあるんです。

打ち合わせの様子

居間・食堂／構造材は40年生から90年生のアシュウスギ。構造材を取ったコアでフローリング、造作材を取っている。部屋の中央には90年生の大黒柱。伐採、搬出、皮剥きと施主はもとより設計者もかかわらせていただいた。これら全てが栗本さんの山から伐り出されたものである。

「熊剥ぎの木で家を造る」建主の気持を大切に

「関わるなら、ゼロか一〇〇」「自分の家のつもりで関わっていく」高島市朽木の林業家・栗本慶一さんの言葉である。栗本さんは、昔から建主とのつながりを大切にしながら、消費者に喜ばれる林業を目指してきた。「自分の山の木で建てた家を建主に喜んでもらっている姿を見て、それが自分のエネルギーにつながり、励まされてもきた」と言う。そんな栗本さんの山から伐り出された木で造られた家、それも柱梁はもとより、床や壁、障子の桟一本に至るまで使われた家がある。建主が家を建てようと思い立ってから完成まで実に三年三ヶ月、多くの人たちが本気でぶつかった家づくりである。

熊剥ぎ材の伐採

建主である今城克啓さんは滋賀県環境森林整備課の職員。二〇〇三年の夏、ある木との出会いから今城さんの家づくりがスタートする。それは栗本さんのもとで、間伐や枝打ちの研修をしていたときのこと、栗本さんの山の木が最近問題になっている獣害にあったのである。「熊剥ぎ」だ。90年を越す立派な杉の木。このまま放置すれば腐ってしまうだけ。栗本さんは伐採を決意した。その木の伐採に立ち会った今城さんはいつしかこの木で家を建てたいと考えるようになった。

杉の曲り材を生かして木材調達に二年を費やす

私がこの家づくりに関わったのはそれから三ヶ月後、完成のちょうど三年前にさかのぼる。朽木の木で家を建てたい方がおられるから設計を頼めないかと、工務店の社長坂田徳一さんからの依頼だった。そして二〇〇三年一〇月、今城さんと初めてお会いし、「熊剥ぎ材」の話に始まり栗本さんの山の木で家を建てたいとの想い、柱や梁を見せる真壁構造でリビングには吹抜けを、見上げれば小屋組みが見えるような空間が良いなどと新しい住まいへの夢を伺った。以前から近くの山の木で家を造りたいと考えていた私は、わくわくしながらその話を聞いていた。そして一回目のプランを提案し、ほどなく栗本さんと出会うことになった。「できることなら家に使う木は、近くの山の木で、しかも誰が育ててくださった木なのか分かるような家づくりがしたい」との私たち造り手の想いや栗本さんの林業に対する想い、栗本さんも「そんな家づくりができれば」と、互いの想いをぶつけ合いながら、熱く語り合ったことを今でも鮮明に覚えている。

そして年が明け木材の準備を始めようと思った一月、朽木を重い雪が襲い「雪折れ」する杉の木が多発した。栗本さんの山も例外ではなく、数十年に一度の大きな被害だった。しかしこの「雪折れ」、折れた部分こそ使えないが、それ以外は十分家の木材として使えるのだ。栗本さんは丁寧に伐採を進めていった。設計にあう木材があれば使って欲しいと、連絡を受け早速山に駆けつけた。土場に積まれた原木を見て驚いた。年輪が詰まっていて、色合いも

よくどの木もすばらしいものだった。中には百三十年を越す大木もあった。「なかなかこれだけの木を伐ることは少ないよ」「今城さんはついてるね」と笑って話しながら原木を眺めていた。そんな中、私は一本の原木が目に留まったのである。「杉の曲がり材」である。

それは根元から大きく曲がっている木で風雪に耐え成長してきた力強さを感じた。私はこの曲がり材を小屋梁に使いたい、と提案をした。栗本さんは曲がり材を使うとは思ってもおられず驚いていた。今までこのような材は売れないから山で捨ててきたという。建主の今城さんも小屋梁は「松」だと思っておられたようでピンとこなかったようだった。私は、今回の家づくりは「全てを杉でつくることこそ意味があるのでは」そして「曲がり材を活かす」というのがテーマになるのではと、二人に語りかけていた。

数日後、今城さんから電話が入った。栗本さんからの伝言だ。「同じ使っていただくなら、家の全ての木材を用意する」「だからどんな木があとどのくらい必要か教えて欲しい」…そして、冒頭の言葉につながっていくのであった。できる限りこの冬に伐採をし、残りは秋を待って伐採をするという。私はそんな栗本さんの心意気に心を惹かれるように時間を見つけては、選木や伐採、玉伐りと、建主とともに山へ足を運んでいった。そしていつしか栗本さんも設計の打合せに加わっていたのである。設計士も山に入り、林業家も設計図面を見ることで、無駄なく木を活かすアイデアが湧いてくる。山の管理を考え自然に負担をかけないよう四十年ほどの若い木から九十年までの木を択伐し、うまく家の部材へと使い分ける。天然スギも自然の成長をこえない程度に少しいただいた。一本の木から柱や梁、板などの必要な造作材を順に製材をしてゆき、ゆっくり自然に乾くのを待った。すべての木材が揃ったとき、気がつけば二年の月日が流れていた。

建具職人が端材に命を吹き込む

そして、二〇〇六年の五月、上棟の日を迎え見事に組み上げられた。工務店の倉庫に桟積みされた一軒分の木材の中から一丁一丁吟味し適材適所に使いきる。「何度数えたことだろう」「板の表と裏を何度見たことだろう」と言う大工棟梁の本間公人さんの成せる「技」である。熊剥ぎの木は毎日身近に触れる床となり、あの百三十年の大木は玄関ホールの床や家の各所のカウンター材となり、また階段の壁となっている。

そんな想いは、建具職人にまで伝わっていた。玄関にある下駄箱の建具はその象徴ではないだろうか。工事終盤、建具職人の大崎俊也さんから相談を持ちかけられた。見当をつけておいた材料も残り僅かとなり、どうしようとのことだった。私が「ウーン」と考え込んでいると大崎さんはある木を手に取り私に見せてくれた。なんと私が栗本さんの土場で初めてみた曲がり材のコアである。

スギの曲がり材

「この木は玄関の小屋梁に使ってある木でしょう」「これでなんかできんかなぁ」と。気にもとめなければ捨ててしまうようなところ。大崎さんはこれを使って建具にしようと提案してくれた。私は、この曲がった板をどうやって四角い建具にするのか想像もつかなかった。私はすぐさま「お任せします」と応えた。普段机の前で設計をしている私より、この木を前にして建具を作る職人さんの感性に委ねたほうがいいと直感的に思ったからだ。出来上がった建具を見て本当に驚いた。今回の家づくりのテーマが感じ取れる建具が玄関という同じ空間で実現したのである。そのような木の使い廻しが、家の中で「繋がり」を生み、「魅力」を出しているのである。

建主の思いが家を活かし、人をつなぐ

山が好きで、木が好きで、自然とのかかわりのある暮らしの時間を大切にしたいという建主の個性と家づくりへの情熱は並々ならぬものがあり、家づくりに関わった人それぞれがその熱意に応え、時間をかけ、智慧を出し合うことですばらしい家となった。

後で聞いた話だが、大工さんが切り落とした材を拾い集めて障子の桟に加工してくれたと言う。それを大崎さんは普通に笑って話してくれた。なんとも頭の下がる想いであった。

私にはこの家づくりを通して多くの気づきや学びがあった。自然の恵みを享受し家をつくることへの感謝。ある木をいかに活かすか。どうやって一本の木を使い切るかなど、考えてみれば今回の家づくりは何も特別なことではないのかもしれない。先人が「普通」にしてきた家づくりの姿ではないだろうか。そんな貴重な経験を活かし、設計者の独りよがりとしか思えないようなことは慎み、職人さんの感性を大切にできる設計者でいよう。住む人が安心して暮らせる、快適で住み心地のよい、住み手が心身ともに豊かになる「普通の家」をつくる努力をしていこう。

玄関／左の柱は天然しぼり丸太。上に見えるのは天然スギの小屋梁。下駄箱の建具は玄関妻壁に見える小屋梁のコアをとっておいたものを建具職人のアイデアでできたもの。

玄関外観／妻壁に見える小屋梁。山で始めてみた杉の曲がり材である。

宮村 太

●みやむら ふとし＝1967年、滋賀県東近江市（旧五個荘町）生まれ。滋賀県立短期大学工学部建築学科卒業、株式会社アサヒ設計を経て、2007年4月宮村太設計工房設立。「安曇川流域・森と家づくりの会」代表。

●宮村太設計工房＝所在地／滋賀県大津市本堅田6-8-18-10〒520-2341
E-mail:YRL02060@nifty.com

写真は、尾瀬のブナ林。湿原や沼を取り囲んで原生林と呼ぶにふさわしい森が広がる。湿原に咲く花を求めて多くの人が訪れるが、この豊かなブナ林があって湿原が維持されていることにも目を向けなければならない。湿原が中央分水嶺近くにあって、日本海に流れる阿賀野川源流にあたることも。琵琶湖と同様に水源の森を知ることと、下流の人の暮らしや生態系を維持することから、本当の尾瀬の保全やツーリズムは始まる。

〈MOH-ECOTOURISM−5〉

ツーリズム最前線

檀上 俊雄

各地の観光連盟や協会が改称する例が好例だが、エコツーリズムを単にツーリズムと呼ぶ場合が多い。そこには従来の観光とエコツーリズムをつなぐ意味や、円満に移行させたいという願いが込められている。その反面、従来の観光を否定しがちなエコツーリズムの過激さを何とか薄めて、観光のステップアップをはかろうとする大手旅行社の動きもある。

旅行者においても旅、旅行、観光、レジャーという言葉を巧みに使い分けている。個人、家族、グループそれぞれでの行き方において、高い精神性を持つか否かで看板を取り替えているかのように見える。

そしてエコツーリズムの現場においても、高い理念のツアーを実施するにあたり、専門知識のないボランティア依存が高いこともあって、旅行業のノウハウ抜きには円滑に事が運ばない事態に直面しているところが多い。新しい分野という意識だけが先行して、旅の歴史や旅行業界の仕組みの把握はおざなりにされてきたことは否定できない。

こうした状況の中で、ツーリズムの進路、あるべきスタイルを考えた時、私が特に注目している地域は、琵琶湖と尾瀬だ。北海道、小笠原、信州、屋久島、西表島など多くのエコツアーが実施されている地域があるが、それ以上にこの二つの地域にこだわるのは、いずれも大都市圏の水源地帯にあたり、自然保護と開発をめぐるおびただしい葛藤の歴史を持つからだ。閉鎖水域という地形的特性もあって、過剰ユースが危機的な状況を作り出しているのである。

日本において水は、生態系を維持する自然の営みの中核を担うものであり、それによって生み出されたきれいな水は、人間の飲料水としてだけではなく、農業や工業用水として、漁業の面でも重要視され、日本では特に貴重な資源であるといえるだろう。石油に代わる燃料としての水素ガスを作る上でも水に注目が集まっている。

このように水問題は大変重要なテーマである。旅行者においてもツーリズムに加えて、ロハスな暮らしを求める時代を迎え、生活圏イコール生態系の基本単位である流域、という考え方が不可欠となってきた。環境を守るということは、この中であらゆる収支が持続可能な状態になることが大前提であるからだ。

環境社会とツーリズムは切っても切り離せない表裏一体のような関係であり、琵琶湖や尾瀬の二つの地域で行われていることが重要な意味を持つことになる。地域が狭く、標高が高い山上にあることなどから、特に環境悪化が深刻なのは尾瀬である。「はるかな尾瀬」という歌が作られた時代の現地を知る人がいたら、立派な木道の整備、マイカー規制、山小屋の予約定員制、徹底した環境対策などに取り組む今日の姿は、別の場所に来たと錯角するかもしれない。

日本を代表する湿原の自然を保護再生することは、技術的にも資金的にも大変なことで、環境省を中心にして三県の地方自治体、東京電力、尾瀬林業、22の山小屋が財団法人尾瀬保護財団という同じテーブルについて、1995年から足並みを揃えて様々な対策が取られている。さらに交通機関や山麓関連施設がこれに連係する。

ここは日光国立公園の一部であるが、保護を徹底させる為に尾瀬国立公園として独立させる動きもある。雪融けの大幅に遅れた2005年で約32万人、これまでのピークである約60万人の入山者をいかに分散させるか、7割が民有地という状態での規制の限界をどう克服するか、課題は多い。

ともあれアヤメ平など自然破壊箇所で植生復元作業に取り組み、60キロにわたる木道を整備し、ありとあらゆるエコの先端技術、設備、システムが導入され、あたかもエコタウンとか環境博覧会のような現状といえるが、それでもまだ不十分という指摘もある。

旅行者の迎え入れは、泥まみれになった時代の慣習である山小屋の風呂にみられるように、石鹸類を使用禁止にし合併浄化槽を設置してでも頑にこうした伝統を守り、快適さを維持しようとしている。さらにすし詰め状態を改善するために予約定員制、個室化も進めらている。

こうした受け入れ側の取り組みとあわせて、利用する側の意識変革も強く求められている。他に類をみない名勝地という考え方だけではなく、いかに自然環境への負荷を少なくするか、過密期を避け、過密コースを避けるなど利用の仕方をひとりひとりが工夫しなければならない段階まできている。

人出が多いことが一流観光地の証し、という従来の考え方は、尾瀬を困難な道へ追いやることはまちがいない。生態系が維持されている本当の自然というものはどういうものか、環境を守る力となる、本当の自然に向かい合う深い意味をこのあたりでしっかりと考えておかなければならないだろう。

環境対策とツーリズム、地域活性化は、車の両輪のような両立する関係であるはずだが、現実にうまく運用できるのだろうか。こうした尾瀬のケースは、琵琶湖保全の取り組みと共通する部分や参考にすべきことが多く、注目したい。

檀上俊雄

●だんじょう　としお＝1951年広島県尾道市生まれ。立命館大学文学部地理学科卒。山と自然研究会青山舎代表。日本旅のペンクラブ会員。
著書／「比良山・湖西の山」山と渓谷社（共著）

「地域とつながる住まい」

清水 安治

あちこち旅をしながら集落の景色を眺めていると、その家並みを特徴づける要素の決め手は屋根であることがわかる。滋賀県ではその多くが瓦屋根であり、渋い色調のいぶし瓦が多い。同じ黒っぽい色でも釉薬のかかった陶器瓦が多い地域では黒さが際立ち、家並みが引き締まって見える。さらに、山陰地方で多く見かける赤い石州瓦は、旅行者にとっては印象強い風景となる。沖縄の赤瓦はさらに個性的で、瓦のすき間を白い漆喰で塗り固められた屋根は異国情緒さえ漂う。一方で、北海道や信州など気温が低く、雪の多い地域では、凍結に弱く屋根の雪下ろしに支障のある瓦よりも鋼板葺きが多く、軽やかな印象となる。いずれも、かつては草葺きや板葺きなどであった屋根材が、地域の気候や素材、技術、歴史などを反映しながら、永い年月をかけて変化してきたもので、それぞれが地域独自の景観を成している。

今では少なくなってしまったが、茅葺きをはじめとする草葺き屋根も地域によって様々な姿を見せている。琵琶湖を中心とする滋賀県では、湖岸に近い地域でヨシ葺き屋根が多く、山手では茅葺き屋根が主である。同じ草葺きであっても、材料を調達しやすいことなど立地するそれぞれの場所の事情が反映されているからだろう。屋根葺き材に限らず、永い年月をかけて徐々に変化してきた日本各地の民家の特性は、その地域のあらゆる影響を受けながら、地域とつながっていることの証となっている。

平成7年の阪神淡路大震災で倒壊した瓦葺きの民家は「瓦は重くて地震に弱い」「瓦が飛び落ちるので危ない」という悪いイメージが災いして、神戸から大阪にかけて阪神間の地域では、あっという間に鋼板葺きなどの軽い素材の屋根に様変わりしてしまった。このことは実は瓦屋根に対する評価に少なからずの誤解と偏見、そして住宅の性能をアンバランスに評価しがちな現在の住宅産業界の体質がもたらしたものであるが、結果的にこの時代の事象を反映した変化ともいえる。

いずれにせよ、民家はその周辺の地形や気候、文化など地域がもたらす様々な制約や恩恵、約束事などと密接に関係しながらつくられてきた。さらに、柱や梁などの構造材や屋根葺き材などの建築部材、大工や左官などの職人技術をはじめとする地域の資源が、いにしえより反映されてきた。しかし、最近では神戸のように耐震性という断片的な観点で住宅の性能を評価し、施主個人の嗜好だけが反映された、地域とのつながりが乏しい民家が多くなってしまった。これは、豊富であるがゆえに氾濫する情報に惑わされることで、地域に

甍の連なる家並み（高島市）

いぶし瓦

山陰地方の石川瓦

受け継がれてきた記憶が断絶され、建築の工法や材料がグローバル化していることで、地域との結びつきが希薄であっても建築することが可能となっているからではないだろうか。

車や家電製品などと同じように、メーカーのカタログから選ぶような住まいのつくり方が、果たして次の世代に受け継いでいくにふさわしい民家の姿であるのか？　琵琶湖を中心とした滋賀という地域とのつながりに関心を抱きながら、未来に引き継いでいくのにふさわしい民家とその住まい方について、次号より以下の視点で見つめてみたい。

◆地域の山とつながる
◆地域の記憶とつながる
◆地域の技術とつながる
◆地域のなりわいとつながる
◆地域の風土とつながる

清水文治

●しみず　やすはる＝1961年、高島市生まれ。自宅の改修をきっかけに古民家再生の魅力を知り、ライフワークとして県内各地で再生に取り組む。民家の古材を活かすとともに、近くの山の木を使うことで、地域の資源にこだわった家づくりをめざしている。「湖北古民家再生ネットワーク」「安曇川流域・森と家づくりの会」メンバー。滋賀県政策調整部地域振興課職員。一級建築士。
連絡先　y-43zu@guitar.ocn.ne.jp

ニュースレポート5
家棟川の活性化

まちを見直すきっかけに

参加者の質問に笑顔で応える松沢さん

news report 5
activaed Yanamune river

家棟川を さくらみかげ川にしよう

滋賀県野洲市は日本最大の銅鐸が見つかった地で、そばを流れる家棟川は琵琶湖に流れる歴史のある川。野洲市は人口5万人、兼業農家が多くを占める。山と川と田園と湖と自然と歴史が残る、静かな町だ。その町に家棟川エコトープツアーを企画するメンバーがいる。「若葉（野洲市基本条例を勉強する会）」は、「さくらみかげ川という愛称を通して町が変わるきっかけをつくりたい。町の良さを伝えたい」と活動を開始した。

■レポーター／辻村敏之（関西大学 社会学科 4年）

家棟川ビオトープ岸辺が美しい

野洲市を流れる家棟川は「桜御影砂」の宝庫

さくらみかげ（桜御影）とは、名前の通り赤みがかった淡い桜色を特徴にもつ、御影石の一種である。

このさくらみかげを名前に冠したエコツアーグループ「さくらみかげ」が主催するウォーキングツアーが3月18日、野洲市で行われた。

目的は、家棟川と琵琶湖の自然環境改善のため、何らかの取り組みに携わっている方々の話を聞きながら家棟川をとりまく環境を考えることにある。9時50分にあやめ港から出発、菖蒲地区を経由しビオトープに立ち寄り、家棟川までを歩く。12時半にはツアーの締めくくりに湖魚料理を食べる予定だ。

出発の直前、「さくらみかげ」の代表である築山達さんは30名余りの参加者に袋を配った。中には10粒ほどの大ぶりな砂が入っている。

「お配りしたのは、さくらみかげの砂です。家棟川の川底には、このさくらみかげの砂が敷き詰められています。私はさくらみかげが大好きです。この砂を河底に掴える家棟川の魅力を、人々に知ってもらいたい」さくらみかげの砂と共に受け取った、築山さんの家棟川に対する思いの深さに触れ、参加者全員は一つの気持ちを共有していた。皆、築山さんを魅了する家棟川を早く見たくてたまらないのだ。かくしてエコツアーはスタートした。前日の暖かさを裏切る寒風の中にあっても、ツアーの一行の足取りは軽く、そこかしこに談笑する声が聞こえ、笑顔が見られる。湖周道路を超えた一行がまず足を止めたのは、吉川地区に広がる広大な田んぼのあぜ道の上だった。田んぼと田んぼの間を流れる用水路を挟み、「魚のゆりかご水田プロジェクト」について、琵琶湖の漁師の家に生まれ育ち、琵琶湖の環境改善活動に携わっている松沢さんから案内を受ける。

家棟川をめざし、田んぼ沿いの道を進む

菖蒲の魚のゆりかご水田プロジェクト

「魚のゆりかご水田プロジェクト」は、フナなどが用水路をつたって栄養源が豊富な田んぼに産卵できる仕組みづくりに取り組んでいる。かつてミジンコ等の微生物が豊富に存在する水田は、稚魚にとって一種のユートピアだったが、いまや水田を遊泳する稚魚の姿を見ることはできない。このビオトープから魚を追放したのは耕地整理である。堰堤の撤去が琵琶湖を泥の湖にした。旧来の水門は農業排水を「下から」せき止めていたので琵琶湖への泥の侵入を防ぐ役割を果たしていた。また水路を流れる水量もあぜ道に迫るほどであったため魚の往来が活発だった。

これに対し、現在使われているメジャーな水門は『上から』排水をせき止める仕組みになっているうえ、水門の高さを超えないよう排水がコントロールされている。琵琶湖へ流れた泥は水質を変え、水門は琵琶湖と田んぼを分断した。

現在、魚が行き来しやすいよう、一部の用水路では水門や排水管に工夫が施されている。

「農家の方の理解と協力があってこそ、魚のゆりかご水田プロジェクトはここまで進みました」

水路と田んぼを見つめながら語る松沢さんの表情は柔らかい。陸と湖を舞台に、数多の交渉が繰り広げられたのだろう、その積み重ねられた時間の結晶に、松沢さんは稚魚が遊び、眠る「ゆりかご」の来シーズンの姿を思い描いているようだった。

参加者は用水路を囲み、耳を傾けた

家棟川ビオトープ

曇り空から日が射し始めた午前11時頃、家棟川ビオトープに到着した。ビオトープとは『生物+棲む場所』を指す合成語である。滋賀ビオトープ研究会の鹿田良男さんによればここ家棟川ビオトープは水質浄化・築山・浅水・深水・中島・高木・砂浜の6つのエリアから成っており、40種類の植物が確認され、ビオトープ・ワークショップが今までに9回行われた。

ビオトープは現在も研究段階であり、内湖の復活に有効なデータの採取が期待されている。失われつつある内湖の再現という目的をもつビオトープは、過去と未来の時間が濃厚に入り混じる空間だ。望ましき未来を獲得するための営為が、このビオトープで繰り広げられている。私達もその営為に参加しているということに、果たして気付いていると言えるのか。水と土と植物で出来たビオトープは、そう問いかける。

ビオトープ

ビオトープを後にし、家棟川にむけツアーの一行は進む。参加者の足取りは軽く、心なしか足早だ。家棟川を目前に控えているという期待が、そうさせているのだ。

11時30分、家棟川に到着する。先ほどから見え始めた日差しが水面と、釣り人を照らすのを眺めつつ、堤防を歩く。

さくらみかげ石の輝きは色の濃い水に遮られ残念ながら見ることが出来ない。しかし対岸に生い茂った草木やヨシが壁のように力強く根を張っており、自然の息吹と静かで力強い鼓動を感じずにいられない。

説明する築山さん

ビオトープをぬけ家棟川をめざす

家棟川でも説明をうけた。

北出さんによる家棟川観光船プロジェクトは、家棟川を下る観光船を通じて家棟川の魅力を発信するという計画だ。県外からも積極的に人を呼び込み川の風景を変えるための試みとして、注目を集めている。船の上から覗き込む水面に、さくらみかげ石はどうみえるのだろうか。実現が楽しみだ。

さらに、浦谷さんによる洗堰の歴史について、堰には戦中から続く歴史があり、当時の風景を示すものは堰堤をふくめ、わずかしか残されていない。洗堰の今後のはたらきは、自然に満ちた風景を復活させるための礎として存在をアピールすることにあるかもしれない。

『さくらみかげ川』をめざして

家棟川へのウォーキングを終えた後、昼食に湖魚の料理を参加者で囲んだ。寒風にさらされ冷えきった体に、シジミのみそ汁の温かさがしみわたり、揚げたてのカワサギの天ぷらにウナギの茶碗蒸しも体を温めてくれる。他にもコイの洗いやハスのなれずし等を頂戴し、空になっていた胃袋は少しづつ満たされていく。

食事を終え、エコツアーの感想を話すメンバー

食卓に並べられた湖魚料理は、普段の食卓における湖魚の不在という事実を明らかにした。水環境の変化は食生活の変化に直結していたことに、湖畔の食卓を再現したこの昼食は気付かせてくれた。

食事中、築山さんは半日を振り返りながら今後の見通しを語った。

「家棟川を『さくらみかげ川』と、皆に呼んでもらいたい。『さくらみかげ川』は観光地として、地産品の源として町を変えることが出来る。エコツアーはその第一歩です」

食事を楽しんだツアー参加者が帰った後も、「若葉」のメンバーが引き続き、会合のため残っていた。「若葉」は野洲市基本条例勉強会として活動している。印象に深く残ったことといえば、ウォーキング時の朗らかな表情、そして琵琶湖や家棟川に向けられた彼女らの天然に対する慈しみがあふれた眼差し。この慈愛に支えられることで家棟川、いや『さくらみかげ川』は今後もますます輝きを増してゆくだろう。

『さくらみかげ川』という名前が流通するのは、案外近い将来のことかもしれない。

参加してみませんか

季節のお楽しみ
年に一度は野洲においでやす。
お問い合わせお申し込みは下記まで。

炭焼きからはじまる「ゆっくりごはん」

アユや、アメノイオを獲った梁漁と、クワガタや、カブトムシを捕った思い出の野洲川が、湖岸緑地公園としてリニューアルオープンしました。新しいビオトープ公園で、竹炭焼きと、吉川の特産野菜を使った野外料理を体験学習しませんか!!

1.開　催　日　6月17日(日)／雨天中止
2.集合場所　野洲市　吉川　湖岸緑地公園(ドリームファーム裏)駐車場
3.集合時間　8:00～8:50(受付時間)
4.参加料金(保険料含む)　大人¥1,000 子供¥500
5.スケジュール
　(1) 竹炭焼き体験
　(2) 地産地消で野外料理
　(3) 農園見学
6.持　参　品　おにぎり、水筒、軍手、お持ちの方は「竹のこぎり」と「ナタ」と「工作ナイフ」

［お問い合わせ］
築山　達

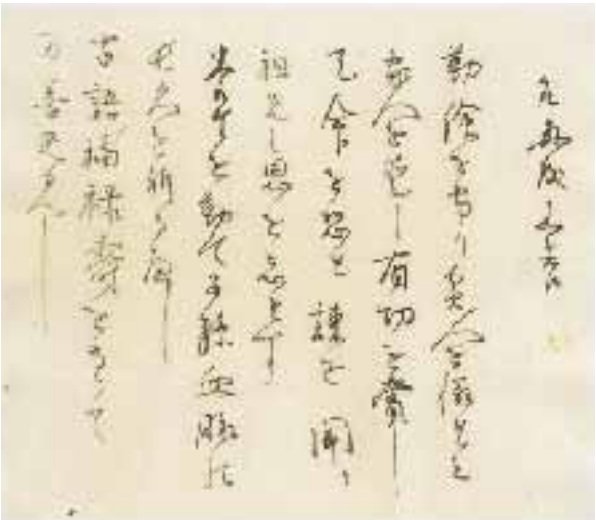
滋賀環境カウンセラー協会
環境省環境カウンセラー登録2004225003
国内旅行業務取扱管理者
NACS-J自然観察指導員
日本山岳協会自然保護指導員
〒520 - 2424
滋賀県野洲市五条328
TEL・FAX 077 - 589 - 5671
e-mail/susumu1tsukiyama@yahoo.co.jp

〈商家の家訓の話　第二回〉

矢尾喜兵衛家の遺言

learn a trade "kakun"

末永 國紀



矢尾喜兵衛書置

矢尾喜兵衛家は、滋賀県蒲生郡日野町中在寺の出身である。正徳元年（1711）生れの初代は、同郷の矢野新右衛門家の武蔵国秩父郡下吉田の呉服太物店へ奉公に入り、寛延2年（1749）に別家を認められて、同国秩父の大宮郷で酒造業と卸小売業の店を開いた。店名を朴屋利兵衛と称した。現在は、秩父を代表する矢尾百貨店と酒造業矢尾本店に発展している。

この一紙文書は、秩父から日野の本宅に宛てられた明治三年（1870）の「勘定帳」に挟みこまれていた。当時の矢尾家の当主は、二三歳の五代目喜兵衛である。五代目は安政三年（1856）、八歳で両親に死別したので、父方の叔父治兵衛が後見した。

明治二年に引退し、翌年に没する治兵衛は、手塩にかけて育てた五代目に対して一七カ条からなる「遺言」を書いている。第一条では、国恩を忘れず、奢りを慎み、貪欲を戒め、陰徳を積むことが肝要であると述べ

ている。第二条は、家業を油断なく励み、功績のある奉公人を引き立て、主従は苦楽を共にしなければ、家を失うことになるとの警告である。

第三条では、妻子への愛に溺れず、主従の間に仁義の道の通いあうことを第一の楽しみとせよ、と諭している。第四条では、先祖の書き残した当主の心得を読めば、ちょっと目には何でもない事柄でも、家業に辛労している者にとっては心に沁みることがあると教えている。

第五条は商家の主人が心学を知らなければ、家の長久は危うく、行動は仁義を離れて、強欲商人になってしまうので、石門心学に心酔していた父親の教えを受継ぎ、修養を積むことを求めている。第六条は、難渋人や病人などのめぐまれない者への施与は、何不自由なく暮らしている者の当然の務めであるとして、決して無慈悲に扱わないように諭している。

以上が、当主の心構えに触れた箇所である。掲示した一紙文書の内容を現代風に翻刻すると次の通りである。

毎度ながら申し上げ置き候
勤倹を守り、貧人を憐れみ
家人を愛し、有功を賞し
天命を恐れ、諫を聞き
祖先の恩を忘れず
養生を勤て子孫血脈の
長久を祈るべし
古語の福禄寿を守りて
万善足るべし

一読、「遺言」のなかに書いた当主の心得を、あらためて簡潔にまとめたものであることがわかる。

末永國紀

●すえながくにとし＝1943年生れ。同志社大学経済学部教授。経済学博士。(財)近江商人郷土館館長。著書／『近代近江商人経営史論』(有斐閣)、『近江商人』(中公新書)、『近江商人学入門』(サンライズ出版)

イラスト：大橋　誠

●おおはし まこと＝1972年滋賀県生まれ。東京にてイラストレーションを学び、平成11年から地元滋賀で活動を始める。現在、滋賀県湖北地域のタウン誌にて北近江の風景を連載中。

study under a leader's wisdom

先人の智恵に学ぶ

環境とエネルギー

板倉 安正

１００年以上も前に田邊朔朗博士は人工水路の疏水を作り琵琶湖の水を京都まで引いて、蹴上の地で水力発電を始めた。このような工事が明治という時代に可能であったことに驚嘆せざるを得ない。驚嘆するのは工事の技術的困難さを克服したことだけでなく以後の日本の産業展開と環境に配慮していることである。水力という自然エネルギーの活用、飲用水の供給、水路輸送の導入、完成後の景観への配慮など、今日の環境とエネルギーを考える上で多くの示唆がある。

今日の環境問題は広い意味でエネルギー問題に集約されると考えている。産業活動を含む人間活動の世界的な拡大はエネルギーの補給なしではありえない。そのためにいろいろな新しいエネルギー源が考案され、またいろいろな省エネ法も提案されている。筆者もその中の太陽光発電に注目して、これを普及させるためのクルーレス（模型の）・ソーラーボート大会を開催してみなさんの関心を呼ぶことに係わってきた。この大会は水の上で行うので必然的に水環境にも目を向けることができ、併せて、内容は「ものづくり」体験そのものである。エネルギー、環境、ものづくりの三つを備えている。参加者は全体から見れば少数かもしれないが、毎年活動的で熱心な子どもから大人までが集まっている。幅広い視野からのエネルギー・環境問題への取り組みの一つであると思っている。

新しいエネルギー源、すなわち再生可能なエネルギーは太陽光、風力、地熱、潮力、水素などが取り上げられて盛んに研究が進んでいるところであり、大いに期待される。周知のように、今日のエネルギー・環境の危機は30年以上前のローマクラブの指摘に始まる。この報告書の根幹は当時のコンピュータ技術を駆使して将来を予測することにあって、エネルギー浪費の抑制と地球温暖化防止を提起した。それは10年前の京都議定書の締結によって持続可能な社会

蹴上げの疏水。水が流れ、鉄道は走り、池となる。春には桜が人を呼ぶ

の追求という形で解決へ向けて歩みだそうとしている。

ところで、持続可能な社会という場合、具体的にどのようなイメージがあるのだろうか。京都議定書でいうところの削減目標は、いかなるシナリオの上にあるのだろう。地球全体の人間活動は安定期に入ったとは思えない。まだまだ発展を志向する国は多く、あるいは自国の生活を支えるために援助を求める国もあろう。これらのファクターはどのように予測に組み込まれているのだろう。ローマクラブの時からコンピュータは飛躍的な技術進歩を遂げている。今これを駆使して予測を深め、より具体的なエネルギー・環境問題解決へのシナリオを持つべきではないだろうか。「持続可能」という言葉だけに期待するのではなく、より具体的な技術的課題として全世界に明示される必要があるように思われる。それはひとり科学技術者の仕事であるというのではなく、全地球人に共通のものとして。

板倉安正

●いたくら　やすまさ＝1940年滋賀県守山市生まれ。1966年大阪府立大学大学院工学研究科修士課程修了後、京都工芸繊維大学工業短期大学部、滋賀大学教育学部に勤務、2006年定年退職。現在滋賀女子短期大学学長。赤外線及び土砂防災科学技術の研究ならびに技術教育及びキャリア教育の仕事に関わる。

心温まる物語

「先生、かわいい」

heart warming story “sweet teacher”

今関 信子

イラスト：千田 満

話をすることになって、卒業式も間近な三月のある日、私は、京都の小学校へ行った。

その日の企画は、地域の方々にも広報されていて、子どもと大人が共に集会を持つらしい。各学年ふたクラスという規模の学校だから、生徒同士ばかりでなく、地域の大人とも、密度の濃い交流がなされて来たようだ。

一時間ほど早く着いてしまった私を、「六年生を送る会をしています、ご覧になりますか」と、教頭先生が体育館に案内してくれた。それぞれの学年が、工夫を懲らした出し物を披露していく。体育館の壁を飾る言葉に、絵に、はなむけの思いが込められていた。

とどこおりなく会が終わった。

（いい会だった……）と、私が思ったとき、校長先生が、大きな筒のようなものを持って、みんなの前に出て行った。

「これから、みんなに、見てもらいたいことがあります。先生は、今まで病気などしませんでした。元気、元気で、学校を休んだことがなかったんやけど、この間、長い間休みました。思いがけな

いことが起こったの。考えなかったことです。

高学年の人は、校長先生が、どういう病気で入院したか知っている人もあるかも知れません。先生は、まだ病気が治っていません。それで、六年生が卒業する日、今のままの校長先生ではいられないのです。髪の毛が、全部抜けてしまうのです。校長先生は、病気なんかに負けたくありません。それで、校長先生は、今から、闘う校長先生に変身することにしました。みんな、見ててください。」

左手から右手から、先生が駆け寄って、筒の中から大きな布を取り出し、ぱーっと広げた。布は、校長先生を、すっかり隠した。かすかに布が動く。子どもたちは、なにが起こるのか興味津々だ。

「準備完了。校長先生、ただいま変身。」

校長先生の大きな声。と同時に布が、はらりと落ちた。ライトブラウンのカツラを被った校長先生が立っている。

「先生、かわいい。」

六年生の女の子が声をあげた。それが合図のように拍手がわきあがった。

一年生も二年生も、先生方も地域の大人も手を叩いている。

「変身成功。にあってるよう。」

「校長先生、とってもきれい。」

「病気なんかに負けないで。」

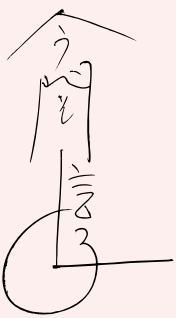
子たちの言葉にこもった思いやりが、はっきり感じ取れた。校長先生の顔が、上気して若々しく見える。

「これから生きていく毎日には、思いがけないことも起きるでしょう。いやなことだって起こる。そんなとき、校長先生を思いだしてほしいの。変身して頑張ろうとしていた校長先生を。先生は負けません。校長先生を見ててね。これから、一生懸命闘いますからね。」

体育館が揺れるほど、大きな拍手が湧いている。伝えたいもののために、身をさらす校長先生を、それを支える先生方を、私は見つめていた。

（一時間早く着いてよかった。）

私は、「学校の力」を目の当たりにして、感動していた。



●いまぜき　のぶこ＝1942年、東京生まれ。東京保育女子学院卒業後、幼稚園教諭となる。7年間保育者として働いた後、創作活動にはいる。日本児童文学者協会理事。
〈主な著書〉「小犬の裁判はじめます」1987童心社　青少年読書感想文コンクール課題図書。「さよならの日のねずみ花火」1995国土社　青少年読書感想文コンクール課題図書、厚生省中央児童福祉審議会推薦文化財。「地雷の村で『寺子屋』づくり」2003　PHP研究所　など多数

●せんだ　みつる＝1950年、滋賀県生まれ。大阪のデザイン会社を経て1980年「イラストレーションスタジオアビーロード」設立。イラストレーションを中心にポスターやパンフレット等を制作、ロゴマークやパース・キャラクターデザイン等グラフィック全般、広告・エディトリアルを中心に活動中。

アウグスブルグから

〈ドイツだより―4〉

Germany a letter

分別収集用のコンテナ

原　修子

「ゴミを収集日まで家に溜めておかなくて良いし、分別が簡単だから。」。

これは廃棄物処理の通訳をした時「住んでいる身として、ドイツの方が良いと思われるところは?」と質問されたときの私の答え。

もう十年前になるであろうか、私は仕事の関係で三ヶ月半程東京近郊県の某市のマンスリーマンションで暮らしていた。その市は厳しいゴミ分別収集で知られているところでもあった。ゴミを九種類に分別する。市からのお知らせと首っ引きで分別したが、最後まで覚えられなかった。対象となる種類の収集日にマンション前の指定されたゴミ置き場へ出しておく。ゴミの量がいくら増えても、収集日の決められた時間帯までは、家の中で保管しておかなければならない。早すぎても駄目、遅すぎても駄目。出張などで収集日に出せない事が続くと、何時の間にか小さなバルコニーのみならず室内もゴミ袋が占拠。ゴミ袋牢獄、ゴミ地獄。

私と同じ様な悩みを持つ人達であろうか、出勤、或は通学時にマンションのゴミ出し場に日にちや種類に関係無くゴミ袋を捨てていた。

ドイツの家庭ゴミの収集と処理は日本と同じように地方自治体の責任で行われている。1990年代に環境と廃棄物に関連する連邦法が相次いで施行された。1990年に「大気汚染防止法に関する第十七法令」、1991年に「容器包装法」、そして1996年に「循環経済促進、環境適合廃棄物処理確保の為の法」。その背後にあるのは「ゴミを処理する前にゴミの再生を」、「ゴミを再生する前にゴミを出さない」、「処理しなければならない場合には、環境に負担をかけない方法で」という考えである。それに応じて地方自治体はそれぞれの方法で対策を実施してきた。その一つが、分別収集のための種類別のゴミ箱を市民に提供する、或は瓶用のコンテナを、古着等には社会福祉団体のコンテナを設置する、またリサイクリング出来る有価値廃棄物を持ち込める有価値廃棄物回収所を設けるというものである。つまり、ゴミを「取りに来てくれる」、「自分で持って行く」という二つの収集方法を並行させている。ゴミ箱は各家庭、各アパート、マンションに用意されていて、毎日ゴミを出すことが出来る。前日出た生ゴミを毎朝生ゴミ用

ゴミ箱に捨てる人。ある程度纏めて出す人。それぞれの方法で利用している。

私の住んでいるアウグスブルク市では家庭ゴミ用には四種類のゴミ箱があり、黄、緑、茶、そして灰と色分けされている。容量も世帯人数、アパート、或はマンションの規模に応じて120、240、770、そして1100リットルとある（茶色は120と240リットルのみ）。そして瓶類、古着類には市内各所にコンテナを用意している。

黄色のゴミ箱は、容器包装法に基づき成立された「DSD（デュワルシステムドイチェランド）」社のグリーンポイントマークの付いているもの（例えば缶、プラスチック容器）を入れるもの。収集されたゴミは、アウグスブルクのゴミ処理センター「AVA」で分別された後、DSD社に引き取られ、第二次資源として利用される。

緑のゴミ箱は、紙類を入れるもの。濡れたり、汚れたりしていなければ、ダンボール、雑誌、新聞、包装紙も入れて良い。これらは同じくAVAで分類され、製紙会社がリサイクリング紙として甦らせる。

茶色のゴミ箱は、生ゴミ、庭ゴミ用。アウグスブルク市の場合、生ゴミと言っても肉魚類は認めないし、たとえ野菜や果物であっても、調理したものは認めない。ご肉類を認めないのはネズミ対策とか。これら生ゴミはAVAにあるコンポストセンターで処理され、コンポストとして販売されている。

そして残りが灰色のゴミ箱。前述の分類の中に入らないゴミ、つまり燃焼処理する以外には方法が無い残余ゴミ用。そして残りが灰色のゴミ箱。前述の分類の中に入らないゴミ、つまり燃焼処理する以外には方法が無い残余ゴミ用である。AVAでの燃焼処理時に出るエネルギーは一方では発電に、他方では遠隔暖房熱として利用されている。自家需要、そして余剰分は売電、売熱されている。

これらのゴミ箱の内、灰色のゴミ箱は買い取りとなっているが、残りのものは市から無料で提供されている。そして有り難い事に収集に来てくれる。市によっては、黄色のゴミ箱に当たるものが無く、市内各地に設置されているコンテナ、或は有価値廃棄物回収所に自分で持って行かなければならない。しかしゴミ処理が有料であることは、ドイツ全国同じである。ゴミ箱の容量と週数回数で料金を決めている市もあれば、アウグスブルクのように、大人一人当たり、子供一人当たりと家族構成によって決めているところもある。子供は大人の半額、三人目からは無料である。例外はアパート、マンションで、ここには住居面積により料金が決められている。割高の料金を支払う事になるのは、一人で広いアパート、或はマンション暮らしのシングル族となる。

さて前述の日本暮らしが終わりに近づいた頃、私はカレンダーに印をつけて、日本から出国するまでの日を数えていた。東京近郊某市のゴミ収集方法にうまく適応出来ず、部屋をゴミ袋

牢獄、地獄と感じるようになってしまっていた私にとっては、出国日はそこからの解放日、出獄日となってしまっていた。もっと長く住めば慣れる事も出来たのかもしれない。いや、アウグスブルク方式にすっかり甘やかされてしまっている私にはそれでも無理であったであろう。もともと掃除片付けは下手で苦手なのだから。

●はら　しゅうこ＝徳島市出身。1972年よりドイツアウグスブルク市在住。國學院大学文学部哲学科及びアウグスブルク大学カトリック神学科卒業。職業、通訳。翻訳。

本の紹介

最近入手した、気になる本をご紹介します。

BOOKS

不都合な真実

●著者／アル・ゴア（アメリカ元副大統領）枝廣淳子＝訳
●発行所／ランダムハウス講談社
●価格／2800円＋税
●内容／人類の文明はエネルギーを消費し発展し続けてきたが、反面それは地球環境を汚染する歴史でもあった。アメリカの元副大統領アル・ゴアが地球の瀕死の症例を紹介しながら、今、人類が取るべき方法を示す。

長農百年史

●編集・発行／滋賀県立長浜農業高等学校
●内容／滋賀県立長浜農業高等学校の創立百周年を記念して「長農百年史」が発行された。学校全般の動きや教育内容の推移を、写真や資料で紹介。また百年の歴史の中で、長農が果たしてきた社会的役割の記載や、エピソードなども紹介している。

大いなる挑戦の軌跡 近江ベルベット株式会社100周年記念誌

●発行／近江ベルベット株式会社
●内容／平成17年に近江ベルベット株式会社百周年を迎え、記念誌を発行。本誌では一世紀を当社がいかに生き抜いてきたかを振り返り、百年のあゆみを資料・写真などとともに紹介している。

バイオディーゼル―天ぷら鍋から燃料タンクへ―

●著者／山根　浩二
●発行所／東京図書出版会
●価格／1100円（税別）
●内容／「バイオディーゼルで地球を救える！」あなたは石油を爆食して地球温暖化による環境破壊という膨大な債務を子どもたちに負わせるつもりですか？

花のお話
flowers topic

若葉の季節

三山 元暎

さし絵：中川 善雄

五月晴れは、もともと旧暦の五月を表したものだが、今の暦でも使える。新緑のまぶしさ、さわやかさが連想され、自然が一段と身近に感じられる季節だ。

湖国の山々は、それぞれ独自の色で装い、光り輝いている。淡いオリーブ色の葉がケヤキ、白っぽく波立ってみえるのがコナラといった具合に。

椎若葉さわぎさはやぎ何思ふか
波郷（石田 波郷）

俳句歳時記には若葉の季題がたくさん載っている。「山若葉」「谷若葉」「里若葉」「窓若葉」などのほか、「椎若葉」「楠若葉」「柿若葉」など個々の木の若葉の美しさを強調する詠み方も多い。

五月晴れに誘われて、近くの県立きゃんせの森まで自転車のペダルをこいだ。常緑の黒ずんだ古葉の中から軟らかく鮮やかに萌え出る「椎若葉」が、空の青さとあいまってまぶしいばかりだった。

俳句歳時記の初夏の部には、若葉と並んで「松落葉」「椎落葉」「樫落葉」など、落葉の季題が載っている。常緑木にとって若葉の季節は、また落葉の季節なのである。若葉がやがて萌黄色となり、次第に緑の濃さをますと、古い葉が静かに枝から離れ土に積もる。そして、これらの木々は年々歳々、五月の風と光の中で世代交代を繰り返し、大木になっていく。

三山元暎

●みやま もとあき＝1940年滋賀県坂田郡山東町（現 米原市）生まれ。長浜市の理事・経済部長を経て1995年8月から2005年2月まで山東町長。同月14日米原市誕生にともない退任。真宗大谷派真勝寺住職。

●なかがわ よしお＝1936年生まれ。滋賀県展、長浜市展、伊吹を描く絵画展など入賞、入選歴多数あり。税理士。

藤樹先生に学ぶ
その5

井上 昌幸

前回は「藤樹先生に学ぶ　その四」で藤樹先生の生涯及び様々な逸話などを説明しましたが、今回は藤樹先生が母親を大切にされ孝行されたこと、三十三才の時に「孝経」を読まれたこと及び「翁問答」を著されたことなどについて説明していきます。

二十二才で父親が亡くなり、母親が一人で小川村で暮らしていることを不憫に思い、二十五才の春に江州に帰省して伊予の大洲に行って一緒に暮らすように話したが、母親は故郷を離れて暮らすことを望まなかったので仕方なく大洲に戻った。

二十七才の十月に命がけで大洲藩を脱藩して江州に帰り母親と暮らすことが出来るようになった。そして刀を売りそのお金で米を買い、農家に貸して生計を立てていた。当時は江戸時代の初期であり武士の身分は農工商とは格段の差があったにも関わらず武士を捨てる勇気は計り知れないものである。

藤樹先生は三十三才の時に「孝経」を読まれて深く感動され、毎朝線香を立て声を出して読まれるようになり、この年の秋に「翁問答」を著されたので、まず「孝経」について説明していきます。明徳出版社の「孝経」から一部を抜粋します。

孝経に「それ孝は天の経なり。地の誼なり。民の行ひなり。」（そもそも、孝は天の〔万物を生ずる〕不変の法則である。地の〔万物を育てる〕永遠の秩序である。〔天地の間

に生まれ、天地の性を受けた〕人間のなすべきことである。〕と述べており、この孝及び経から「孝経」と呼ばれるようになり、天・地・人の三才を一貫する不変の法則であることを示しています。

そして、中里介山著の「藤樹先生言行録」に「孝」の字句を次のように説明しています。「天・地・人・万物は皆孝より生じたものである。孝の字は老・子の二字を合わせて作られており、天地がまだ開けていない何も無い状態を老として、大気を子とする。天地がすでに開けてからは天を老として、地を子とする。日を老として、月を子とする。この理を以って万事万物を深く眺めてゆけば、孝の理が無ければ生ずるものは何も無いことがわかる。」

藤樹先生は弟子たちに、まず孝経・大学・中庸を学び、ゆとりがあれば論語と孟子を学ぶように指導されており、孝経の思想を大切にされていたようである。

孝経の中で孔子が弟子の曾子に「孝行があらゆる道徳の根本なのだ。・・・わが身体は両手・両足から毛髪・皮膚の末々に至るまで、すべて父母から頂戴したものである。それをいわれもなくいため、傷つけないようにする。それが親孝行の始めなのだ。立派な人物になり、正しい道を行い、名を後の世までも高く掲げて、それで〔あれは誰の子よと〕父母の名を世に広くかがやかせる。それが孝行の終りなのだ。・・・詩経に『汝の祖先のことをつねに忘れることなく、祖先の徳を受け継いで一層盛んにしなければならない』とある。」と話されている。また、「親を愛する者は〔必ずその親を愛する心を推し広めて他人を愛するから〕決して他人を憎んだりしない。親を敬する者は〔必ずその親を敬する心を推し広めて他人を敬するから〕決して他人を軽蔑したりしない。」と「愛敬」の大切さを話されている。

現代の家庭・学校・職場の中では、この基本的な「愛」が欠如しており、親が子を、子が親を更に小学生が同級生を殺し、そして祖先から受け継いだ大切な命を粗末にして自殺するという悲惨な状態が続いている。また、父母・先生・目上の人を「敬」するという本来の日本人の心が失われてしまっています。

次に、「翁問答」について、藤樹書院発行の「翁問答」から抜粋して説明していきます。藤樹先生が大洲を去ったため、かつての同志たちから自分たちで学ぶためのテキストを仮名書きでつくってほしいとの要望があり、「翁問答」を著しました。その内容は「孝経」を中心にして、孝行のあり方、武士道のあり方、学問の仕方について弟子と老師の問答の形で人間の一生の道を説いています。いくつかの例を上げていきます。

問　孝行する上で、守り行なうことを教えて下さい。

答　人は天地の徳、万物の霊であるから、人の身心に孝の実体がみな備わっており、身を立て道を行なうことが

工夫の要領である。身をはなれて孝はなく、孝をはなれて身がないのであるから、身を立て道を行なうことが孝行の綱領である。（「身を立てる」とは、宇宙万物の根底にある本体、天道の本体を明らかにして失わないことである。「道を行なう」とは、このふたつの本体を明らかにし、常にそれに従って人々と交わり、万事を処理することをいう。）

問　庶民の孝行とはどういうものですか。

答　農工商のどの仕事でもその業務をよく務め、怠らないで財産や食べ物を蓄え、無駄遣いせず、身心ともによく慎み、法律を守り、自分や妻子のことよりも父母の衣服・食べ物を第一に思って心から尽くして、あらゆる努力をして父母が喜んでくれるようにもてなし、よく養うことが庶民の孝行である。

問　親を愛敬することだけが孝行ではなく、その徳を明らかにして、各自の仕事に精を込めて務めることが大切なのですね。

答　そうだ。つまるところ、明徳を明らかにするのが孝行の本来の姿であるから、心に無駄になるような一念をおこして、怒る必要のないことに腹を立て、喜ぶべきでないことに喜び、願うべきでないことを願い、悔やむ必要のないことを悔やみ、恐れなくてもよいことを恐れるのは皆親不孝である。心掛けて慎み、注意しなければならない。

問　人間として第一に願い求めるべきものは何でしょうか。

答　心の安楽に極まる。

問　人間として第一に避けて捨てるべきものは何でしょうか。

答　心の苦痛以外に無い。

問　苦労を取り去って楽しみを求める道は何でしょう。

答　学問である。

問　学問で苦痛を取り除き、安楽を得る道理はどのようなものですか。

答　元来、私たち人の心の本体は安楽なものである。その証拠は幼児より五六才までの心を見ればわかる。世間では幼童には苦悩がないように見えるので仏さまのようだと言っている。このように心の本体は安楽で苦痛がないものなのである。苦痛はただ人々の惑いから自ら作っている病気なのである。心は例えば眼のようなものである。眼の本体は立てに開いており自由に物を見るとはっきりわかり気分も爽快である。もし塵や砂が眼の中に入ってくると、眼を開けることが出来なくなる。物を見てもはっきり見えない。また眼が痛くて我慢できない。一旦痛みが我慢できないといっても塵や砂を取り去った時には本体にかえって開閉が自由になり、物を見るとはっきりわかり気分も爽快である。そのように心の本体は元来安楽であるのだが、惑いが塵や砂のように入って来て種々の苦痛が我慢できなくなる。

学問はこの惑いの塵や砂を洗い捨てて、本体の安楽にかえる道であるので、学問をよく努め工夫して用いていけば元の心の安楽にかえることができるのだ。

少し内容が複雑になってきましたので、武部武著「中江藤樹」（清水書院）の一部を抜粋して説明していきます。

「『翁問答』によれば、人間が一生涯の間、心に守り身に行なうべき道がある。この最高に重要な道は、すべての人がその身に備えているものである。この道を守って、社会生活をする時は、人間関係が整って社会生活がうまくいくし、神々にお仕えすれば神々もその人をお受け入れになり、心の平安が得られる。道に従って、政治を行なえば天下国家がうまく治まり、家庭生活をすれば家族仲むつまじくなる。道に従って振舞えば行動はいつも正しく適切であり、道に従って心が働くならば、心は曇りなく正しく働くのである。このように、道は人間にとって二つとないすばらしい宝物なのである。道はこのように広大であると同時に、われわれ人間の身のうちにも備わっているのであるから、人間の心を生まれつき持っている者は、誰でも道をわがものとして道に従うことができるはずである。天地の子として生まれた人間は、すべて兄弟であり、人間の心を持って生まれ、身に道を備え、道を実践できるという点では、人間は本来平等である。」

この「翁問答」を著されたのが今から約三七〇年前であり、現代とは時代背景が違うところもあり、今では「孝行」という言葉が死語となってしまっていますが、我々には日本人としての大切なＤＮＡが受け継がれています。

第二次大戦後、日本人本来の精神を壊滅するような教育方針になり、人間にとって一番大切な道徳が忘れ去られてしまいました。

今一度、父母・先生・目上の人を愛し、尊敬する心を養う努力をしようではありませんか。特に、幼児や小学生に人を愛すること、人を敬することの大切さについて分かり易く教えていくことがさしせまった重要なことではないかと思います。

井上昌幸

●いのうえ まさゆき＝1940年1月1日生まれ。2000年日本電気硝子（株）定年退職。現在、滋賀県異業種交流連合会会長、STEP21（滋賀県シニアテクニカルエンジニアリングパートナーズ企業組合）専務理事、滋賀県技術アドバイザー、大津木鶏クラブ代表世話人、近江素交会代表世話人
〈資格〉ISO14000&9000審査員補

くつきの森へようこそ!!の巻

作:オノミユキ

くつきの森でとれた土を使っての陶芸教室。
チェンソーで太い木を伐り倒したり、丸太ひきをしたり。
恥ずかしがりなので前で喋ることは出来ませんが、
食べものを囲んでおもしろい話をすることは得意。
まぁなんど、「くつきの森」に眼わりをが、モットーですから。
では一体、くつきの森って昔はどんな森だったの？
40～50年前は、この森は麻生地区の人たちの山でした。
山は「ホトラ山」といい、生えている シバ（細い木）を刈って、
山のふもとの穴ぼこに入れ、
牛に踏ませて肥やしにしていた。
また、太い雑木は伐って…
炭に焼いて、売っていたらしい。

伐ったあとの切り株からは、新しい芽が出て…
20～30年たつと、また炭に焼けるほどのまで成長する。
こうやって山と田と生活は、緊密していたのである。
人が山に入ることで獣が里に下りて来ることがなかった。
ところが石油燃料の登場で、
炭の需要は減り、炭焼きはすたれた。
雑木は不要となり、田んぼもつぶして、植林することになった。
スギとヒノキが高く売れる、ということで、みんなせっせと植えたのである。
ところが外国の材が安く輸入され、国内材は売れず、植林地は荒れ放題。
そして今から30年程前、そんなやせた山を新聞社が買いとって「富士の木材オープン！」
その後、「新日の森」を1年前に「くつきの森」として
どうやって活用しようか
森の恵みを
先生里山ミュージアムは引き継ぎだ。
そこでまずはインストラクターを開催して
森に癒わいをとりもどす
ということになった。
さらに、ボトラ山から植林地となった林を皆伐し、
ネイチャースキー場として冬も活用できるようにした。

●オノミユキ（本名 加藤 みゆき）＝1974年生まれ。滋賀県志賀町育ち。1997年に朽木村（現高島市）に移住。朽木の自然、行事、人間などを3冊の本にまとめ出版。現在は2人の子どもを子育て中。

MOH editor murmur

編集長のつぶやき

自然に自分を主張する大きな器に私はなりたい

つじむら ことみ

今回は嘉田知事と郷学長の対談で幕をあけました。女性のリーダーの視点と滋賀県の取り組みをリンクさせようという、やや力技の特集です。女性のリーダーは注目を集めており、人材育成の上でも期待されています。

しかし、私、実は、”女性リーダー“という事にアレルギーがあるんです。ムダに年令を重ねている事の劣等感、会社での挫折、後輩の退社ショック、変にまじめで責任感が強くそれにつぶれる自分が情けない…。だから、正面に受け止められなくて怖い。強く見られがちですが、実はもろいんです。

なので、今回の対談は、本当に強い人を見たような気がしました。本当に強い人は、背伸びをしない。自然に自分が主張できて嫌味じゃない。そして、器が大きい。そうなんだ力みがないんだ。頭と心のスペースが広いんだ。と、感じ入りました。

成功体験を持たない私が、取材という擬似体験で、成功の嬉しさと苦労というつらさを体感します。滋賀県には、地域をもり上げようという、純粋な湖国人がたくさんいます。今回の取材で実感しました。まさしく、自分の時間とお金と知恵を湖国発展のために振り絞る、彼らの前向きでひたむきな生き方には、時に勇気と恥じらいを感じます。複雑な思いの中で、16号を編集しました。

私は、どこに向かって、なにをしようとしているか。迷いながらの前進です。さて、どこに行くのでしょうか？次号をお楽しみに。

講演日記

lecture diary

皆様のご支援でたくさんの講演依頼を頂きました。
2月～4月の講演をダイジェスト版でお知らせします。

ごみと水環境を考えるつどいの講演

- 日時：2007・3・10
- 主催者：ごみ問題を考える草津市民会議事務局
- テーマ：循環型社会の構築について
- 場所：滋賀県立水環境科学館
- 参加者：80名
- 内容：1．エネルギーが70年後に枯渇する　2．循環型持続可能性　3．国の問題と政策　4．地域で生きる　5．家庭と企業の役割　6．ゴミと水環境問題は町づくりに通ず

ルッチ大学講演

- 日時：2007・3・13
- テーマ：コミュニティと市場～もったいない市場の提案～
- 場所：山東町ルッチ大学
- 参加者：30名
- 内容：1．大量システムの功罪　2．新しいコミュニティの創出　3．「もったいない（循環）・おかげさま（共生）・ほどほどに（抑制）」　4．市場は経済活動の場だけでない　5．今日の経済力は死守しなければならない

読者の声

a voice of reader

読者の方からいただいたお手紙の一部をご紹介します

●15号をお送り頂き、ありがとうございました。手にとって最初に「わーんと泣いた」のページが開きました。熱く、暖かい涙がこぼれました。「母さんの肩越しに私たちは顔を合わせ　ふふふふ、ふふふふ、いつまでも笑った」まっちゃんは、どんなにかうれしかったでしょう、幸せだったでしょう。情景が浮かびます。すばらしい母さんですね。もう、涙・なみだ・涙、止まりませんでした。

怒りや悲しみの涙を流すニュースばかりの昨今、ひとりひとりが、こんな母さんを目指せば、どんなにか暖かく、住みよい世の中になるでしょう。私もかくありたいと思いました。

ありがとうございました。……

……岸田　京子

●「MOH通信」の11号から、中井二三雄さんのショート・ショートを拝読させていただいております。短い文章の中に、何ともほのぼのとした、心に残る爽やかさを感じるのです。これからも読ませていただきます。

●私が企業の取材の際に感じた事

～前後略～

一つ目、当然「担当者の熱意」

二つ目、フムフム「担当者の熱意が通じる社風」

三つ目、なるほど「トップ（経営者）が環境保全を重要視している」

そして、四つ目に「パートナーシップ」の言葉が入るよう、きんき環境館の役割を果たしていきたいと思います。（編集後記より抜粋）

……きんき環境館　環境省近畿環境パートナーショップオフィス　担当　宮本　加奈（大阪）

●MOH通信を拝読しました。真摯に精力的にご活躍されていることに感動し、頭が下がる思いです。私も身を引き締めて参ります。……

……龍　圭之輔（彦根市）

●幸せな気持ちで読ませていただいております。……

……小寺　栄里子（兵庫県）

《次号予告》

発刊3周年記念特大号

2007年8月発行予定

■取材

＜創立60周年を迎えた新江州を探る＞

■特集

＜地域を元気にする秘訣＞

技術をかえよう

行政をかえよう

企業をかえよう

教育をかえよう

工業をかえよう

環境をかえよう

意識をかえよう

■ 読者座談会

（なりゆき会＋野洲生活学校＋KIESS＋近江環人）

■ 執筆者テーブルトーク

■ 安城市

■ 岡村本家

■ 熊取町

■ 京都エコロジーセンター

■ 京都人形ハウスあいとわ

■ 小杉農園

■ 学校図書を考える会

ほか

編集後記

editing voice

継体天皇即位1500年を記念して、「うしの祭り」が安曇川町三重生神社で行われました。古式ゆかしく、神官が、ゆかりの歌を三度唱えます。それから扇子で言の葉を扇ぎます。ご神木に宿った神がしかと受けたのでしょう。滞りなく神事は終了しました。年に一度は神の存在を感じるのもいいかも・・・・

……琴

《M·O·H通信》購読受付中！

あなたも「M·O·H通信」を購読しませんか。特典として、M·O·H通信、講演会のご案内をいたします。活動やこの通信についての、ご意見もお聞かせください。

あなたのお名前、年齢、郵便番号、住所、電話番号、fax（あれば）、e-mailアドレス（あれば）、あなたの心に残った一言をご記入の上、お申し込みください。通信をお送りします。申込書をfax、郵送、mailでお送りください。

《M·O·H通信》購読申込書

フリガナ		年齢	希望口数
お名前			1口=3,000円
住　所	〒		

電　話	FAX	メールアドレス

あなたの心に残った一言、MOH川柳をお書きください。

※記入いただいた内容については、目的以外のことに使用または転用はいたしません。

キリトリ線

M·O·H通信　Vol.16（通巻17号）2007年5月25日発行

●編集・発行/新江州（株）
循環型社会システム研究所
M·O·H通信編集局
代　　表　森 建司
編 集 長　つじむら ことみ
編集協力　稲垣 重雄
村山 明子
寺川 智美
東良 真紀
取　　材　細井 美保
辻村 敏之
デザイン　伊達デザイン室
写　　真　辻村写真事務所
印　　刷　新江州（株）情報C
ブ ロ グ　松崎 和弘

●ご協力
＜滋賀県＞
琵琶湖環境部水政課　琵琶湖環境政策室
エコライフ推進課
教育委員会
商工労働部
琵琶湖環境科学研究センター
（社）滋賀県社会福祉協議会
高島市

＜執筆者懇談会＞
内藤 正明　檀上 俊雄
海東 英和　山口 美知子
下西 康嗣　堤 幸一
末永 國紀　進 ひろこ
花田 眞理子　中村 誠
弘中 史子　奥山 武生
今関 信子　結城 美枝子
山崎 隆　松崎 和弘
三山 元暎　井上 昌幸
加藤 みゆき　辻村 耕司
本間 義典　佐々木 洋一
（順不同、敬称略）

●支援
新江州（株）

〒526-0111
滋賀県長浜市川道759-3
TEL.0749-72-5277
FAX.0749-72-8681

★ブログ　滋賀・咲くブログ★
http://shiga-saku.net
<http://shiga-saku.net/>
キーワード＝moh

[購読費振込先]
M·O·Hの会　代表　森 建司
●滋賀銀行 長浜支店 普通　136987
（モウノカイ　ダイヒョウ　モリケンジ）
●長浜信用金庫 本店 普通　0577468
（モウノカイ　ダイヒョウ　モリケンジ）
●びわこ銀行 長浜支店 普通　721691
（モウノカイ　ダイヒョウ　モリケンジ）

※記事中での写真・本文につきましては、無断転載を禁じます。